

「第10回市民参加懇談会」 第1部 議事録

日 時 : 平成17年9月26日(月) 13:30~17:00

会 場 : アクロス福岡「国際会議室」

事務局 それでは、定刻になりましたので、市民参加懇談会 in 福岡を開会させていただきます。

本日まで参加の方を紹介させていただきます。

まず、パネリストの方々を紹介いたします。本日は4名のパネリストにお越しいただいております。

読売新聞東京本社論説委員、井川陽次郎さん。(拍手)

九州大学大学院工学研究院教授、出光一哉さん。(拍手)

女性のくらし研究所所長、大谷鮎子さん。(拍手)

NPO法人エコネットふくおか事務局長、小出まするさん。(拍手)

続きまして、原子力委員会市民参加懇談会のコアメンバーを紹介いたします。

本日司会進行をしていただく科学ジャーナリスト、中村浩美さん。(拍手)

第1部につきましては、会場からの参加となります消費生活アドバイザー、碧海西葵さん。(拍手)

エネルギージャーナリスト、新井光雄さん。(拍手)

生活情報評論家、井上チイ子さん。(拍手)

WIN-Globa1、WIN-Japan会長、小川順子さん。(拍手)

社会評論家、小沢遼子さん。(拍手)

ジャーナリスト、東嶋和子さん。(拍手)

九州大学大学院教授、吉岡 斉さん。(拍手)

最後に、市民参加懇談会座長である木元教子さん。(拍手)

それでは、これより先は木元座長、よろしくお願いいたします。

木元座長 本日は本当にお忙しい中をご参加いただきまして、まことにありがとうございました。

今までに市民参加懇談会についてお聞きの方もいらっしゃるかもしれませんが、私は原子力委員の非常勤ですが、ことしで8年目になります。原子力に関して興味を持ちましたのは、自分が放送の仕事をして、中村さんと同じようにテレビでニュースキャスタ

ーをやっていますときに原子力についていろんな情報が入ってくるんですけども、なかなかわかりにくい、それはどういうことなのか。それから、疑問を持ったときにそれを受けてくれる窓口というのはどこなのか。国なのか、あるいは九州電力のような事業者の方なのか、あるいはそういう関連の団体なのか、それもよく見えませんでした。それでも、原子力に関していろんな発言をしておりますうちに、民間から、しかも女性で原子力委員が今まで出ていないということでお声がありまして、勉強させていただいて、委員としてここに入ってきています。

その中で感じましたのは公聴会、公に聴くという会はあるんです。それは原子力発電所を新しく設置する時とか、あるいは何か変更があるとか、新しいシステムを導入するとか、そういうときには公聴会を開くんですけども、何かそれが、私が見聞きした中では、一方的に壇の上に並んで説明があって、それを聞く。そして決まったパターンのようなご質問があったりして、それで終わる。お互いに満足感というのが得られなくて終わってしまうということが多分あったのではないかと、それは私も実感いたしました。それで、原子力委員会の中にそういう公聴会、公に聴くでなくて、広く皆さんが原子力にかかわること、私たちの暮らしにかかわるエネルギーのこと、原子力のこと、そういうことへのご意見を聞く窓口はないだろうかということで一生懸命考えてみました。

そこで、平成13年ですけれども、たまたま新潟県の柏崎刈羽というところに原子力発電所があり、そこで住民投票がありました。争点はプルサーマルを導入する、しないということで、僅差で導入しない方がお当選多かったということがあり、導入は今ストップになっているわけです。そのときに反対なさった方からお手紙をいできて、市民の声を問うという形で自分たちは会をやったけれども、国の考えを聞く場所が何もない。集会を開くから来てもらえないかということで私もお手紙を差し上げて、そこからいろいろとお話をしているうちに、やっぱり市民が主体的になり、その市民の声を私たちが受けとめる、原子力委員会なり国が受けとめる、事業者が受けとめるというシステムがなければいけないのではないかとということで、平成13年からいろいろ勘案いたしまして、14年に初めてその問題提起をしてくれた柏崎刈羽村で市民参加懇談会を開催いたしました。そういうことからこの市民参加懇談会が始まっております。

皆様のお手元の袋の中に資料が入っていると思いますが、市民参加懇談会の活動についてとか設置の趣旨であるとか、これまでの活動、などが書いてありますので、後でお目を通していただければありがたいと思います。

その次に、別添 1 というのがあると思いますが、そこに市民参加懇談会について - 活動の目的と内容のご説明 - というのがあるんですが、これも後でお読みいただければよろしいのですけれども、一言だけ言わせていただきますと、この中に 1 . と書いてあって、市民参加懇談会設置の趣旨というのがあります。これは原子力基本法で定められている中に原子力の行政の民主的な運営を図ることとか、原子力委員会が原子力の研究開発及び利用に関する事項について企画し、審議し、決定することが任務というふうに書かれていて、この 1 . が受けているというわけです。原子力政策を策定する場合に、市民の声はどういうふうに届くのかということは全く見えない。今、原子力委員会では原子力政策大綱というのをつくりまして皆様方のご意見をちょうだいして、まとめているところですが、原子力の政策に関して市民の声はどういうふうに反映されて、市民の意見としてどう集約されるのかということが問題になるわけです。そういうふうに原子力政策の策定プロセス、それにおける市民参加の拡大を図り、原子力政策に対する市民との信頼関係を確立するための方策を検討しております。このような目的を果たすために市民参加懇談会を設置したと、こういうことです。

先ほどご紹介ありました市民参加懇談会はコアメンバー、いわゆる実行委員的な方々をお願いしております。ペーパーが入っていると思うんですけれども、その中からさっきご紹介していただいた方にご列席いただいております。原子力委員会主催なので私が座長をさせていただいておりますけれども、きょうは原子力委員会の近藤委員長、それから町委員はウイーンの I A E A に行っておりまして留守なんですけれども、あとお二人の委員はお見えになっているので紹介させていただきます。齋藤委員長代理です。それから、前田委員です。この 2 人が参加させていただいております。コアメンバーを中心に私たち原子力委員は皆さん方の声を聞かせていただいて、それを今度は原子力策定のプロセスの中に反映させていくという作業をしております。きょうの結果も全部原子力委員会にご報告すると、こういう形になっております。

この懇談会の趣旨からいって、例えば今、九州電力の場合には、プルサーマルがクローズアップされています。プルサーマルはいいのか悪いのかというご意見をこの会で聞くわけではありません。今回はあなたが知りたいと思われる情報は届いていますかという投げかけをいたしました。ですから、例えばプルサーマルについての情報というのはどんなものがあるか、私はその情報がほしいんですけども、届いていないとか。それから、情報は来たけれども、とんでもないとかいろんなものがあるかもしれません。あるいはわかり

にくかったとか、「知りたい情報は届いているか」そこを切り口にして、きょうはいろんなご意見を賜りたいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

今までコアメンバー会議は22回ぐらい開いていますし、市民参加懇談会はこの福岡で10回目になる、そういうことでございます。まだまだ十分ではないかもしれませんが、きょうの皆さんの忌憚のないご意見を承りたく思っておりますので、よろしくお願いいたします。

1部の方はこちらの中村さんの司会でパネリスト4人の方に、知りたい情報は届いているかということを基本にご意見を述べていただきます。1部が終わりまして、今度2部の方はきょうご参加いただきました皆様からお手をお挙げいただいてご意見を賜ると、こういうことになっておりますので、よろしくお願い申し上げます。説明会ではありません。ご意見を私どもが伺う会でございますので、よろしくお願いいたします。

それでは、中村さんお願いいたします。

中村コーディネーター 木元座長、ご苦労さまでした。

それでは、第1部、パネルディスカッションは私が司会進行を担当させていただきます、中村です。改めてよろしくお願いいたします。

きょうこの第1部の方なんですけれども、井川さんは新聞の論説委員ということで、東京でふだん仕事をしていらっしゃるわけですが、そのほかの3人のパネリストの皆さんはこの九州でお仕事をされていたり生活をされていたりということです。会場の皆さんはもちろん福岡を中心にした九州の皆さんだと思いますけれども、この第1部のパネルディスカッションのパネリストの皆さんのご発言をお聞きになって、多分共通するテーマを持っているなというのもあるでしょうし、私とはちょっと受け取り方が違うなとか知りたい情報というテーマだけれども、その知りたいという意味が違うなとか、皆さんいろいろお感じになるのではないかと思います。そういうものを踏まえて、第2部の方は会場の皆さんが主役ですので、会場の皆さんに自由に発言をしていただくと。必要があれば、一部のパネリストの皆さんにも追加のご発言とか質問とか行っていただいても結構です。

それから、コアメンバーが来ておりますので、コアメンバーは今、木元座長が申し上げましたとおり、皆さんの声を聞く、それを原子力委員会、国の原子力政策、エネルギー政策に反映させるその道筋をつける役割ということですから、皆さんと議論をしに来たわけではありませぬので、議論はしないですけれども、皆さんの忌憚のないご意見をいろんな角度から伺って持って帰りたいと、このように考えておりますので、よろしくお願いいたします。

します。

それではまず第1部、パネルディスカッションなんですけれども、きょうのテーマは原子力とくらし～知りたい情報は届いていますか～というテーマです。

まず最初に、4人のパネリストの皆さんにこのテーマに沿ってご発言をお一人ずついただきます。そのあとで自由討論という形にしていきたいと思います。

それでは、私の方から発言順は指名をさせていただきますが、まず最初に、地元からご出席いただきました大谷さんからご発言をお願いします。大体お一人10分以内ぐらいをめでにまずお話ください。

大谷講師 はい、わかりました。

大谷です。こんにちは。

私は、今日は「知りたい情報は届いていますか」という話をする前に、先ず「知りたい情報」を一括りにしていいものだろうかと疑問に感じたことを話したいと思います。

「知りたい情報」というのは立場によって違うと思うんです。一般市民が知りたい情報と、原子力発電所のある立地点に住んでいらっしゃる方の知りたい情報というのは違うのではなかろうか。それが一緒になって「知りたい情報」を出していますよと言われても、ちょっとおかしいのではないかなと思いました。いろいろと調べてみますと、確かに情報は数多く出ています。国からも電力会社の方からもそれぞれのホームページでも発信しています。それから、テレビでもコマーシャルを出しています。新聞にも、情報誌にも出しています。ありとあらゆる手段でこれ以上何があるんですかと言いたくなるほど情報は出ているんです。まして、原子力発電所の展示館に行ったら、これほどたくさんな情報誌が要るんだらうかというぐらいパンフレットが山のように展示してあります。同じようなことが書いてあります。これを見て「もったいないな、紙のむだ遣いではないか」と思います。問題は、それが一般市民の私たちの暮らしの中ではほとんど目についていないことです。特に国から出ているものは、一般市民の目に触れにくい場所においてあることが往々にしてあり、なおさらわかりにくい。そういった面で、私は「知りたい情報」は、目的に応じて分けて考えるべきではなかろうかと思います。

次に、届ける手段なんですけれども、今言ったように、ありとあらゆる方法で届けようと努力していただいている熱意はわかるんですけれども、問題点と改善点についても当事者は、常に考えておかねばいけないのではないのでしょうか。ただ、問題を投げっぱなしにするんだったら、受け取る側も同じことになるのではなかろうかと思います。私は一

般市民の立場で受け取る側としても、「こういう受け取り方をしないといけない」というようなことも考えてみるべきではなかろうかと思います。

私は、１１年前から原子力発電所の一般市民見学会を電力会社とは一歩離れたところで実施しております。これを始めるときは「原子力のことを何にも知らない素人の女性たちが原子力発電所の見学に連れて行って大丈夫か」というような意見が電力会社の方にありました。「素人だからこそ、どちらの立場にもない、いわゆる生活者の目としてぜひとも原子力発電所の現状を一般市民にちゃんと見てもらいたい、それだけの気持ちなんです」と熱い思いをぶつけていきました。原子力発電に対する「あつものにこりて、なますを吹く」市民の態度に手をこまぬいていられなかった。けれども、電力会社に往復のバス代を出していただくとか、添乗してお世話をする人件費を出していただくとか、双方が納得するまでに３年かかりました。いざスタートすると「この仕事では誰が得するの」と質問攻めにあい、「バスで連れていかれたら４０万もするような布団を買わされるのではないか」とか、「高い鍋を売りつけるのではないの」とか、いろいろ言われました。でも、本当に私たち情報を受け取る側の市民もちゃんと勉強しなければいけません。そして、私たち市民は「原子力発電所は何をしているところなのか」ということをきちんと頭の中に入れて、子供たちにも説明がある程度出来るようにならなければなりません。難しいことは分からないにしても、基本的なことぐらい話せるようになるのが、一般市民の理想ではなかろうかと。もちろん理想論であるかもしれませんが、やっぱり理想は高く、行動は一步一步というところから始めましてもう１２年目を迎えました。

１１年の間、鹿児島県の川内原子力発電所で延べにして８万人以上の一般市民の方をお連れしました。その中で出てきた答えというのは、やっぱり「百聞は一見にしかず」。一言で言ってしまうえば簡単なんですけれども、本当にいろんな方が「確かに行く前と行った後では全然違う、原子力発電所を直に見ることが出来てやっぱりよかった」と実施したアンケートにも表れています。９１１のテロ以来、現在は、原子力発電所の中央制御室まで入れないんですが、その以前はちゃんと申し込めば入れましたから、中央制御室で真剣になって働いている若い社員を見て、自分の息子たちの姿にダブらせて「ああ、これなら安心だな、我が息子を原子力発電所で働かせても…」というお母さんたちが、体験して納得してもらったということがとてもよかったなと思っております。

見学会に来る人たちに「原子力に関するパンフレットを見ましたか、どこで入手しましたか」と聞くと「いや、そんなものはどこでもらったらいいか分からないし、もらったこ

ともない」という意見が多いんです。ですから、たくさん作って、たくさん配ろうというのではなくて、種類はたくさんあってもいいけれど、どこに置いているかも分からない情報というのはちょっと問題ではなからうかと思っております。

これは多分受け取る側にも問題があると思うんですけれども、受け取る側も相手が「どうぞ、どうぞ」と差し上げるまで手をこまねているのではなくて、「あ、疑問だな」と思ったら自ら取りにいく姿勢が必要に思います。それが行政の窓口であれ、図書館であれ、電力会社の窓口であれ、市民として当たり前の行動になりたいものです。

それから、もう一つホームページでの告知が、このところずっと増えました。以前はホームページの告知なんていうのはほとんどなかったんですけれども、今はもうたいいのところがホームページで告知しております。ただ、本来の目的よりも、告知する側の自己満足だけではないかと思われるものも散見しますので、これは今後の課題として残るでしょう。見学者に「ホームページの告知を見えていますか」と質問するのですが、ホームページを見れる人というのはパソコンが扱える人なので、平日の昼間に見学会に参加できる人の大多数が「見ていない」と答えるのもむべなるかなです。

私も「メルマガ鮎通信」というのを毎月出していまして、配信先は約1,000人ぐらいですが、メールアドレスを持っていない人たちには、この情報は入っていないわけです。その人たちに「私はいま、こんなことをやっていますよ、こんな考えで生きています」と情報を発信するのにどんな手段があるかなと思ったときに、ファクスか手紙か電話かしがありません。ファクスで送るのは、手紙や電話に比べると割合簡単ですが、大量になるとやっぱり大変なんです。インターネットだとあっという間ですが、効率がいいわけです。でも、今の現状ではパソコンが扱えない人が4割。扱えても見ない人も入れると4割には届かないなというのが私の実感です。10人いたら4人には情報は届いてないということです。届いていても開けようとしなければ、それはないのと同じなんです。

開けさせるためにはどうしたらいいかということですが、今、メルマガジンで最も読まれているというのが小泉首相の「らいおんはーと」ですね。内閣府が発行する情報は、けっして面白いとは思えないんですけれども、小泉純一郎さんがとにかく1度目を通して、それから返事をするということもあるというような噂話を見聞きますので「ちょっとぐらいは面白いかな」と開けてみるのではないかなと思うんです。開けてさえもらえれば、伝えたいことが半分は通じると思うんです。インターネットはこれからの情報手段として外してはならないツールです。メルマガ通信をぜひやったらいいのではないかなと思います。

具体的な提案をしますが「らいおんはーと」の向こうをはって、原子力委員会の委員である木元教子さんに登場していただいたら如何でしょうか。テレビで顔が売れている木元教子さんがちゃんと監修をする「メルマガ通信ちょっと待って」とかなんとかのタイトルで「原子力のことをいろんな人間が、いろんな角度から考えましょうよ」という内容だったら、けっこう開けてみたくなるのではないかなと思います。これはご本人には直接言っておりませんので、請けていただけるかどうか分かりませんが私の提案です。

それから、新聞広告についてなんですけれども、新聞広告を「何回出しました、これだけ出しました」と誇らしげにおっしゃっています。が、特集記事を両開きで出されると、それだけで何かうんざりして、読みたくない。それよりもちょこちょことしたコラムで、ちょっとずつ出してあった方がちょっと読んでみようかないう気になります。全部読むには時間がないけれども、ちょっとだったら読めるんです。

それともう一つは、「これは正しいことなんですよ、いいことなんですよ」というようなことばかり書いてあると、かえって疑いたくなるのも人間の性なんです。それよりも、真剣に一生懸命にまじめにやっていますというような具体的な例を上げて、例えば現場で働く人の声をとり上げるとか、身近で暮らしに即した話題につなぐ工夫が必要ですね。

最後に、国からの広報官がオフサイトセンターで働いていらっしゃるんですね。せっかく地方に来ていらっしゃるのに、地元との交流がほとんどというぐらい無いんです。もっと地元に関心を持ちたいと多分思っていると思います。国からいらっしゃった方は大体2年か3年ぐらいで代わられますので、その間に地元を知り、交流したいと思っいらっしゃると思います。地元の方から声をかけて「ぜひ一緒に遊びましょう」というような形をとっていくことがいいのではないかなと思っております。

まずは「知りたい情報」を、どういうふうに分けた方がいいのかということと、届ける手段としての問題点と改善点のご提案を申し上げました。ありがとうございます。

中村コーディネーター ありがとうございます。

大谷さんの木元さんのメルマガというのはなかなかアイデアだなと思うんですけれども。では、続いて出光先生、お願いしましょうか。先生が研究されていることもちょっと含めてご発言いただけますか。ご紹介をかねて。

出光講師 九州大学の出光でございます。

では、自己紹介もかねてということで、自己紹介の方から始めさせていただきますと、名前が示すとおり九州の出身で出光という名前は珍しくて、非常に覚えてくださる方が多

くて、必ず一言言われるのは、石油関係の方ですかと言われます。毎回答えるのが、地元
というか実家は近くですが、姻戚関係はありませんと。残念ながら石油を安く買えません
ということを毎回同じように答えておりますので、皆さんにこの場をかりて先にお話しさ
せていただきます。

そういう出光という石油関係のような名前の方が原子力をやっているということで、
これまたよく興味を持たれるんですが、私、昔といいますか、学生時代も原子力の方を勉
強してきました、その前から話し出すと長くなりますけれども、昔はコンピューターとか
が好きで、そちらをやりたかったんですが、大学に入るところにちょっとどこを受けるかで
悩みまして、電気系をやるか、原子力をやるかと。電気系は趣味でできるから原子力をや
ろうということで勉強する方は原子力を選びました。ということで、原子力について集中
的に大学時代は学ぶことができて、その後、就職先も茨城の方の昔、動燃事業団と言いま
して、今はサイクル機構と言いますが、そちらの方に7年ほどおりまして、そのころちょ
うど日本が始めたばかりの再処理関係のところ、その仕事と廃棄物関係の仕事をさせて
もらいました。そのころの7年間というのは非常に充実しているというか、情報が密に入
ってきて、ある意味専門ばかなんですけれども、そういうところで最先端のところをやっ
てこれたというのは非常によかったと思います。その後、ちょっと大学に移りまして、今
度は自分で細々と研究をしながら、学生たちにその情報を伝えていくと、そういう情報発
信側の立場にもなってきました。ということで現在に至っております。

きょうのテーマが知りたい情報は届いていますかということですが、学生たちに教えたり
ということもありますけれども、昔と違いまして、昔だと大学の先生、小難しい話を偉
そうに話をしているとありがたがられると、そういう非常にいい立場だったんですが
も、最近大分変わりました、学生が先生の講義を評価するようになりまして、わかりやす
い話をしないと、この先生の話はわからんと言って逆に学生から赤点を出されると、そ
ういう状況になってきました。できるだけわかりやすい話をしなければいけないというふう
に努めなければいけなくなってきました。それでいて、なおかつ情報を正確にしなければ
いけないということで、これはなかなか難しく、わかりやすい話をする少し正確さに
欠けると。正確に話をしようとする、難しくてやっぱり理解してもらえないということ
で、何度も会える学生に対しては最初簡単な話から始めて、少しずつその学生の理解に合
わせてだんだん知識を正しくしていくと、そういうことができるんですが、きょう
のような話、例えばマスメディアから情報発信するというような場合だと、すべての人の

理解度がそろっていないので、なかなか万人にわかるような説明がしにくいということがあるかと思います。

きょう、資料を１枚ついていると思います。電気新聞の資料があります。プルサーマル玄海３号に妥当と書かれている１枚ものがあると思いますが、これは別に今から中身を説明しようと思っているわけではないんですけれども、これは電気新聞の８月３０日付のもので一面のコピーなんですけれども、あえて電気新聞というのを出しておりまして、一般の方々が余り購読されない新聞をちょっと出してあります。ある意味、業界関係者がよく読む新聞ということで、その一面にプルサーマルが載っていて、下の方にちょうどニューヨークの原値が７０ドル台になったということで、それも載っていると。すぐ横には発電効率が上がったというような、いろんなエネルギー関係の情報が満載された新聞なんですけど、この中で見ていきますと、例えばプルサーマルの記事につきましても、実は淡々と書かれておりまして、もともと新聞の役割がそうなんですけど、こういうことが起こりましたと、こうなりましたということが実に淡々と書かれているんです。こういった話は全体の情報がわかっている人はこの部分、部分の、要はジグソーパズルのピースを集めていって全体像が見えるかもしれないと思うんですが、ただこの情報だけを見ると、例えば全体像が見えないと、このピースの意味がわからないということになるかと思います。

それで、そういうのを補完する意味もあって、時々大学なり、あるいは原子力学会、ここですと九州支部なんかで講演会とか、あるいは公開講座とかそういったものを開いたりいたします。ちょっと宣伝になりますが、１０月２６日が毎年原子力の日ということで、ことしも原子力学会の九州支部も講演会をやっておりますので、ぜひ興味のある方は来てください。

そういったところでいろいろ解説をやらないと多分こういった記事の内容というのはわからないと思うので、必ずこのテーマというわけではないですが、いろんなテーマについて講演会なりを企画することもあるんですが、どうも原子力という名前がつくと来ていただけないと、そういうところがあります。興味がないわけではないと思うんですけれども、訴えかけられないのか、人がなかなか集まらないということがあります。

実は、私はエネルギー量子工学部門というところに所属しているんですが、もう一つ九大の別の環境システム研究センターというところも所属しております。二足のわらじではないんですが、廃棄物もやっているということで環境絡みのところにも実は所属しています。そちらの方でも公開講座とかをやって、環境という名前がつくと定員を超える方が集

まってきます。そちらの方で原子力の話とか廃棄物の話とか、そういうことをする機会もあったんですけども、そのときはよく聞いてくださるんです。だから、聞き手の方が一体何を聞きたいのかなというところがなかなかつかめない、興味を持っているんだろうなと思うんですけども、どういう興味なのかというところがいまいちつかみ切れません。

私の方にはいろんな情報も入ってきます。一部は私たちも新聞情報だけというときもありますけれども、新聞情報あるいは学会誌とかそういったものから得る知識もあります。それを全体像を見ながらそのパズルのピースを見るのと、ただピースだけを見ているのでは意味がつかめないと思います。それを全体像を見るような形で読んでいただけているのか、あるいは興味を持っていたかということところが非常に気になるところだということです。

ちょっと話がまとまりませんが、以上で終わらせていただきます。

中村コーディネーター ありがとうございます。後ほどまたご発言いただきます。

では、続いて小出さんにご発言をお願いします。

小出講師 NPO法人エコネットふくおかというところで事務局長をいたしております小出と申します。よろしくお願いいたします。

ここは福岡市の施設、臨海リサイクルプラザを市の委託を受けまして、企画と運営をしております。ごみ減量とリサイクルを目的に1階から3階まである大きな施設で楽しく活動しています。ごみ減量の提案、コンポスト110番、石けんづくり、リフォーム、エコクッキングの講座開催、講師派遣、毎日フリーマーケット状態の販売、企業のリサイクルの現状の展示、リサイクルギャラリー、館内外のイベントの出展、リサイクル家具の販売、持ち込み家具の修理、会員のトレイ調査によるスーパーマーケットと行政との三者懇談会、商品研究、研修、韓国全土のYMCAのグリーンショップとの姉妹交流などが主のもので、大変忙しい毎日で、活動しております。よろしくお願いいたします。

この情報は届いていますかというところのテーマなんですが、93年に江田五月氏が科学技術庁長官と原子力委員長をされましたときに、国民に原子力発電についての意見を公募されたことがあります。その意見を出したのに対してQ&Aの冊子ができて送ってもらいましたが、私が出した意見は載っておりませんでした。「日本列島は地震の国であり、万が一にも事故の可能性のあることはやめてほしいのですが、その点についてはどう考えられているのか」というものだったと思います。

何の返事もなく、本当にがっかりしたのですが、その翌年 95 年に阪神・淡路大震災が起きました。地震が起きる時や場所が予知できていないのが現状です。福岡の玄海沖地震はまさしくそれでした。福岡で地震が起きるのなら日本中に本当にいつ、どこで地震が起きても不思議ではないと思ったくらいです。90 近い夫の母が、福岡の地震には本当にびっくりしていました。その上、人災とも言えるようないろいろな事故が、あちこちの原子炉に起こり、不信が募るばかりできました。何しろ、ある日の新聞で日本列島の原子炉の絵地図が両面見開きいっぱいのサイズで掲載され、「おや、いつの間にこんなにいっぱい」と思ったことです。そのようなわけで、この懇談会のテーマの情報が届いているかには「否」と答えるしかありません。

勝手ですが、答えるのに時間はかかっても、それなりの答えは送って欲しかったと思います。

原子力発電を始めたからには、できるだけ処理をしないといけないことはわかります。日本が N P T : 核兵器不拡散条約や I A E A : 国際原子力機関の多くの契約国の中でもその実績から特に認められていることは理解できます。しかし、いつも頭に心配を抱えて、国内はもちろん、国際的にも諮りごとをしていかなければならないことをするより、例えば太陽発電のように、何の心配もなく、技術と普及の向上を図れば図るほど安くなるものに力を出すことの方が得策のように思えてなりません。省エネを守る家族を初め、日本の 4,700 万世帯に何ワットかの太陽光発電パネルを配っていくことさえできる費用ではないかと思うほどです。97 年、平成 9 年には 1 キロワットが 110 万円もしていました。現在は 60 ~ 70 万円となってきました。農水省もバイオガスに力を入れていますし、地熱、風力、燃料電池と、頼もしい新エネルギーが進歩をしています。

ヨーロッパの方で廃止の方向へ進んでいるのはなぜなのでしょう。昨年 11 月のある新聞によると、「ドイツでは原子炉の廃止時期を 5 年から 10 年の延期をすべきと指摘している専門家もいるが、原発の新規建設費用は熱効率が 57 % もある最新の天然ガス火力発電所の 3 倍で、原発の新規建設の関心はない」とあることでも理解できます。

日本国民は町単位で、国単位で赤ちゃんまで何百万の借金を背負っているとよく聞きます。これがどこかで一度でも狂うとどうなるのでしょうか。災害は多く発生するは、そちらまで費用は出せないはという事態だって起こり得ることも考えておく必要があります。このところの災害は半端なものではありません。今日のテーマである「原子力と暮らし」の原子力については、戦後の便利さを追求するだけ追求した、私たちの暮らしの結果、と

られた手段であるわけです。この膨張したとも言える便利な暮らしを、どこまで“豊かさはある”小さな暮らしにできるのかを考えていくことが先決です。

もともと電力消費が増えたからといって野方図な消費は間違っています。使えば使うほどを許す電力対策は無理があります。一家の経済と一緒に、ないものは使えないのです。国民を挙げて、どう電力を使うのか話し合う必要があります。自家用車や家電製品、その使用待機、自動販売機、コンビニ店の普及、宅配便などを利便のよいままに受け取ってきたところで、日本のエネルギー消費が上がっているのです。CO₂に関しても、CO₂の排出量をとにかく言う前に、消費のみにCO₂を出す自家用車の利用が問題にされるべきだと思います。

ここで一つ、私の提案を話させていただきます。

昨年のことです。福岡市の人工島はいまだにいろいろ話題があり、問題ありなのですが、できたからにはよい利用をと思い立った民間の菜の花プロジェクト委員会の誘いもあって、循環型社会の実践を試みています。菜の花の栽培、収穫、食用油の収穫、天ぷら油回収、再利用のリサイクル石けんづくりやBDFとして車の燃料にするものです。菜の花殻は堆肥にしています。実際には小学生、中学生、ボランティアを入れて3ヘクタール、実際には2.4ヘクタール、ヤフードームと同じぐらいの広さに種まきをして、3月には満開を楽しみました。2.4トンの種をとりました。収穫の時期が遅かったりして地面に何倍もの種がこぼれ、ことしの夏には畑一面に芽が出ていました。ですから、うまくすれば何倍もの種が収穫できるはずです。現在、油にされつつあります。日本の各地にこのBDFで走っている車もあります。とすると、菜の花を日本中の川土手に、休耕田に、空き地のすべてに植えて、これを車のBDFとし、中東からのオイルを減らすぐらいの案はいかがでしょうか。これには高校生ぐらいから30歳ぐらいまでの間の若者に2、3年の兵役ならぬ農役をお願いして、1年はこれに従事していただくことにするとよいと思います。あとの2年は農に関する技術、実技や流通、経済も含んだ幅広い実地体験です。土に触れること、植物を育てることで心まで豊かにすること請け合いです。

日本は四季があり、緑濃い山や川をいっぱい持った本当に自然に恵まれた国です。川にふたまでして車を走らせたところにも反省点があります。農を捨て、工業国として背伸びしたことによる大きなひずみを感じます。これもバランスの問題だと考えます。やはり土台は食です。農業国日本としてすべての人が地に足をつけた生活が必要です。まずは子供たちに農の体験をしてもらうことです。そして、最近は特にCO₂の発生に関しても原子

力発電のメリットにもよく出されることですが、菜の花栽培時の出す酸素は油を絞った後の残渣をバイオガス等に利用するときに出るCO₂にも余りあるものではないでしょうか。もっと地球の土を感じることをできる暮らしをしたいと思います。臨海リサイクルプラザでエコネットふくおかはそのような暮らしの見直しの提案をたくさんさせていただいております。

ありがとうございました。

中村コーディネーター ありがとうございました。

なかなか体験に基づく小出さんのユニークなご提案をいただきました。

では、井川さん、どうぞ。

井川講師 今いろいろな話を伺って一番最後になっちゃったので、ちょっと言いにくいなというのもあるんですけども、皆さんをちょっと否定しちゃうというか、何なので、僕は実はこれはしゃべりに来なきゃいけないなというのを聞いたときに、「知りたい情報は届いていますか」という、このそもそもの名前が頭をひねったというか、非常に悩ましいなと思った次第です。

何でかということ、知りたいということがわかるということは、これはめちゃくちゃ難しいこと、何が知りたいかというのがわかることがめちゃくちゃ難しい。それは、何がわからないかということがわからなきゃいけない。これは歴史とか、いろいろな過去を見ても、特に科学技術の分野も歴史も何でもそうでしょうけれども、何がわからないかということの問題設定するというのが一番実はめちゃくちゃ重要なことで、それができたらもう後はすごくすっきりすることなんですね。

例えば、地動説と天動説なんてありますけれども、僕らは普通に見ていれば太陽が東から上って西に沈んでいくので、地球が動いているというよりも太陽が動いているというふうに目の前にはどう考えたって見えるんだけれども、いや、違うんじゃないかと考えたり、問題を設定した人がいたから宇宙のことがずっとわかって、重力というのがわかってきた。それから、数学だっていろいろな問題を設定することによって解くので、例えばフェルマーの定理って聞いたことあるかもしれないですけども、ああいった問題を設定することによって学問でも人間の知るということがすごく進むんだと思うんですね。

それで、はて、この「知りたい情報は届いていますか」というときに、この知りたい情報というのを一般の方が何を知りたいと思っているのか、先ほど出光さんも何を知りたいのかよくわからないとおっしゃっていましたが、つかむのが大変だとおっしゃって

いたけれども、実は知りたいことを知るというためには、何がわからないかということをはっきりさせるためには、実はすざまじく勉強をしなきゃいけなくて、実はそこまで行くと、恐らく原子力委員会の委員の先生方よりその人が詳しいんだろう、多分原子力の最先端まで知っているんじゃないか、政策も含めて何でもかんでも知っているんじゃないかというぐらい知らないと、本当に知りたい情報というのがないんだろうなというので、この「知りたい情報は届いていますか」というそもそもの表題に私は実は首をかくかくひねっていて、きょうは何か来るのが気が重いなど、いきなりテーマから否定したら怒られるんじゃないかなとか思っちゃっていたのが実はきょうの正直な心境なんです。

それで、本来私どもマスコミ、私も新聞記者をしていますので、本来マスコミというのは、本当にみんなが知りたい情報は何だろうなというのを僕らがかかりにというのもえらそうなんですけれども、取材をいろいろなところによって、本当に必要な、あるいは知っておくべき情報というのは何なんだろうということを新聞とかで紹介させていただくというのが多分役割なんだろうなと思っています。

時には原子力をやっている方から、何であんなものをあんな大きく扱って、我々の足元を揺るがすんだと怒られることもこれありだし、先ほど新聞広告に書いてあるけれども、あんなのはうそとおっしゃらなかったかな、大谷さんが何か新聞広告に書いてある、あれは広告なので、確かに僕も時々しんどいなと思うことはあるんですけれども、一般の記事では逆に言えば現場の人の声であるなり、小出さんのようなご意見の方のお声も取り上げたりして、なるべく問題点というのは何なのかな、本当はみんなが知るように努力すべき情報というの、すべきというのもえらそうなんですけれども、した方がいい情報というのは何なのかなという一つの問題設定をしようかなということで我々は仕事をふだんしているつもりです。

それに対して、どちらからも不満の声があったりなんかして、なかなかうまくいかないわけなんですけれども、実は我々は一つ知りたい情報の何を知りたいのかというのを手探りしながらやっている。それが一番多分難しいというふうに思っています。

それで、もう一つやっかいなのは、知りたいということがたとえわかったとしても、わかったり、あるいはこれが問題だということになったとしても、それがなかなかかみ合わない、知りたい人と知らせたい人がかみ合わない。まさに出光先生がおっしゃったようなことの齟齬が起きちゃうということですね。特に日本の原子力政策というのは変わっていて、特に学者さんと役所の人がほとんど決めているので、どうしても話を聞いてみると出

光先生には悪いんですけども、おもしろくないし、なかなか聞きに行っても学問的に話したりなんかして、ちょっと辛いな、まず前置きから始めてという大学の教科書とかみたいなお話の仕方をする人が非常に多くて、なかなかわかりにくいということがあって、いつもかみ合わないわけです。

先ほど大谷さんの方から、何か見学会をやったりして、いろいろ市民の方が原子力発電所を見に行くと勉強になると言うんですけども、実はそういう現場で一度見ると、これはよく何となくわかったぞという気になって、実は小出さんのように原発は不安なんだというふうに言われると、やっぱり不安なんだと、地震が起きたら壊れちゃうかもしれないみたいなことで、ふらふらっとまた反対の方に揺さぶられて、なかなかそういうふらふらするというのが続いているというのが現状だと思います。これは何かというと、本当に自分が何を知りたいのかということが実は設定できてないからそういうことになるんだろうなと私は思っています。

例えば、原子力発電所が地震によって不安だといったって、それは多分世の中の何事も技術というのはトラブルが起きることはあるので、それが破局的にならないようにみんな努力しているわけです。車だってまさにそうだし、先ほど菜の花のお話なんかもあったんですけども、確かにそれも傾聴に値して、それもすてきだなと僕は思うんですけども、日本の食糧自給率4割というところで、日本じゅう菜の花畑にしたら、私たちはもっと食糧自給率が落ちてやばいんじゃないかとか、あるいは天気が悪くなったら車が走らなくなるのかとか、いろいろなことを考えちゃったりなんかするわけです。

そういういろいろな意見がある中で、本当に知りたいことがわかってないのがいけない。それで、なおかつもう一つ一番いけないのは、知りたいと思って勉強しようかなと思ったときに、先ほど皆さんからご意見ありましたけれども、答えてくれる専門家、あるいはより深い答えを探す場所というのが実はないんですね。図書館行ったり、市役所行ったりという例もありましたけれども、そういうところにある本というのは、例えば図書館に行くとしたわけか、九州ではよくわかりませんが、私は東京の国立というところに住んでいるんですが、そこは市の職員の方が社会党系の方がめちゃくちゃ多いので、図書館へ行くと大体反原発の本しか置いてないということですね。そうすると、市民の方がますます図書館に行くと、何か調べようとする、やっぱりやばいんだということしか学べないということになるわけです。

じゃ、どうしたらいいのかと、僕は常日ごろ考えているんですけども、知りたいなと

いう好奇心、興味を持たれた方が深く知ることができるための手段というのを持ってなきゃいけない。それに学者さんはなかなか答えるのが余りお上手じゃないと言ったら、また出光先生に怒られちゃうかもしれないんですけども、やはりゼロから講義みたいにしてまず基本は核分裂というのはみたいな話からおっ始めると、いや、勘弁してくださいよという感じに多分なるんだろうと思うんですね。だから、それをうまくしゃべれる、しかもなおかつ勉強しようという人がちゃんと深く情報をとれるような、そういう情報の集め方、あるいは提供の仕方をしなきゃいけないんだろうと思っています。

現状、いろいろな情報があると言いますが、実は原子力委員会なんかでつくっている、木元先生には申しわけないんですけども、ホームページなんかを見ても、あるいは国の予算を投入したホームページとかでいろいろなQ & Aのホームページとかつくっていますけれども、実は相当古い内容しか出てなくて、学者さん、役所の方というのは古い情報を最新のものにしていける努力というのがどうも余り上手じゃないということがあるらしくて、むちゃくちゃ古い情報でしかなくて、最新のいろいろな起きた問題に対して深く回答しているがなくて、結局のところいろいろな身の回りで起きている、今起きていることにどう考えたらいいんだろうという知りたい人にさえ答えていないというのが現状だと思います。したがって、僕はそういう中で本当に知りたいという問題設定をできた人に答えるために何をすべきかというのをもう少し多分原子力の人や役所の方は考えなきゃいけないし、僕らの仕事としてはこれを知りたいんだという人なるべくふやせるように、読者の方になるべくそういったインフォメーションというか情報、記事をふやしていかなきゃいけないなというふうに思っています。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございました。

まさに井川さんが言われたように、我々はこの呼びかけのテーマで市民参加懇談会を開くケースというのが全国各地であるんですけども、何が知りたいのかということがわかったら、届いているか、届いてないかという判断ができるんですけども、何が知りたかったのかがわからないで届いているかと聞かれても、届いているんだか、届いてないんだか、それはわかりませんよという話になりますよね。そこは確かに一番難しいところで、そもそもの設定がきょうちょっとおかしいんじゃないと言われたら、それでごめんなさいとこっちもなっちゃうところなんですけど、それでも皆さんが発言してくださったように、もう少し一歩入って考えると、情報を伝える側のテーマと、それから受け取る側のテーマ

と、これがあるということは多分皆さん共通していらっしゃると思うんですね。提供する方にもたくさん課題はまだあると。

それから、大谷さんが指摘されたように、受け手の受け取り方にもやっぱり課題があるんじゃないかというところは、多分これから皆さんのご意見をさらにお伺いする基準のところになるのではないかなと思うんですけれども、それとともに出光さんがおっしゃったジグソーのピースを情報として見ているのと、そのときに全体像の中でのピースを見ることがいいのか、あるいはピースから全体像を想像してこの情報について自分は思うとか、さらに何が知りたいとか、そういうふうに能動的になっていけるか、そのところの問題もすごく大きくて、ここもしょせんはと言ってしまったら、多分議論はそこで終わってしまうのかなと思うんですが、送り手、受け手それぞれに課題、問題点、難しい点があるんじゃないかというのは、皆さんに共通したご指摘だったと思うので、このあたりでもうちょっと膨らませてお話を伺っていきたいと思うんですけれども、送る送り手、それはエネルギーの問題で言えばもちろん国があったり、事業者があったり、それから自治体というのももちろんありますね。それから、学者、研究者というのも当然あるわけですが、先ほども話がありましたけれども、出光さんは送り手の側の情報を提供する側の最大の問題点というか、クリアしなければいけないポイントというのはどのあたりにあるとお考えになりますか。

出光講師 難しい質問なんですけれども、それでぱっと答えを出したらこういうフォーラムをやっている意味がないぐらいのお話だと思いますけれども、ケースによって違うと思いますけれども、要はマスメディアを通じて、あるいはホームページを通じてというふうにやると、画一的な情報を一度に流すことはできますけれども、個々の理解度がそれにかわるものに個別に対応ができないと。今度は逆に人数をぐっと絞って身近な人たちにすると、その人たちの知識はその都度対話式で上げることはできるけれども、多くの人というのは向かないというところで、それをどう両立させるかというのが難しいところだと思います。

ですから、方策としては余りこれといったのはないんですが、人海戦術でいくとすれば個別に対話形式で、少人数でやるようなものをたくさん開くというものもあるかと思いますが、それが100万人単位になってくるとそうはいかないでしょうし、かといって100万人の人に情報を提供するといって画一的にやってしまうと、個々の受け取り方がばらばらになってしまったり、あるいは間違っ

スもないということになると、そこら辺が問題で、回答は出てこないんですけれども、そこをうまくやれるような手法ができれば、多分この問題は解決していくんだと思うんですが、どうでしょう。

中村コーディネーター　すぐに答えの出る手法が見つかるはずはないので、見つかったらどこかで実行されていると思うんですけれども、ただ一つは井川さん、マスメディア、マスコミの役割というのを受け手が非常に幅広いと、知識、興味、好奇心というのも非常にいろいろな層がある人たちに、まず基本的にわかってもらわなきゃいけない情報を流し続ける、提供し続けるというのがまずメディアとしての仕事としてありますよね。そこからメディアというのは、さらにということは何からできるんですかね。

それは質問の仕方が悪いんですけれども、送り手のテーマであるとともに、結局また受け手のテーマにもこれはつながってくるんだと思うんですよね。今の出光先生が言われた、例えばそういう小さな集まりで情報をより深めていくということを数を重ねるというのは、これは送り手の仕事であるとともに受け手の作業かもしれないなというふうに思うんですけれども、そういう中でマスメディアの役割というのはどういうふうになっていくのかなというところなんですけれども。

井川講師　なかかな難しい質問なんですけれども、まさにいろいろな人がいるので、よくこういう今日はおられるのかどうか分かりませんが、特に新聞記者というのは専門家の方からはばかにされていて、反対の方からは商業新聞は国の政策の宣伝をしているみたいというふうに怒られると、どっちからも怒られるんですけれども、例えば新聞はいつもそを書いているという言い方をされる方がおられるんですね。

そうすると、例えばさっきの物のたとえじゃないですけれども、いろいろなたとえ話をして物を伝えたと正確じゃないとおっしゃるんですけれども、これは専門家の方も実は既に相当やっぴやして、例えば原子力発電所の燃料なんていうのは「燃える」というふうに専門の方もおっしゃいますよね。ところが燃えるというのは、化学反応で酸素が結びついて燃えるんですけれども、あれは核燃料は燃えてはないですよね。ところが専門家の方もそうおっしゃる。たとえ話等をして説明すると非常に間違いが入って、なおかついろいろな誤解ができちゃう。だから、それは非常に難しいんですけれども、これは多分僕個人かもしれないんですけれども、実はいろいろな方に伝えるので一番いいのは、読売新聞だと、原子力推進系新聞と皆さんは見ている人が多いんだと思うんですけれども、実は僕は個人的には反対運動をやっている人に非常なる期待をかけていまして、彼ら、彼女たちは

実は非常に僕らよりも問題設定というのを相当上手にやっていただけるんですね。

それで、逆にそういった部分について、僕たち新聞というのは本当はそこにちゃんと問題の本質というか、どういうことでこういう問題が起きてきて、どうしてこういう議論が起きているかということを中心にきちんと伝えるというのが実はいろいろな層の人に、関心を持っている方にお伝えするのに一番ずっと入っていくのかなと。それはある意味反対運動の方の物の言い方なり問題設定なりが非常にお上手で、それを借りているということになるんですけども、僕は非常にそういう意味では頑張っしてほしいなということを実は思っておりまして、原子力委員会の長期計画策定会議なんかでも、もっとNPOの人たちは頑張れというふうに書いた方がいいんじゃないかと僕は実は言ったわけですけども、僕は一般の人にやはり伝えるという意味では、いろいろな参加者がこういった議論をする場があるというのは、議論をする、まさにさっき申し上げたように、何が知りたいかというのを提起してくれる参加者が多いことが一番いろいろな層の人に議論に参加してもらえて、なおかつ場合によっては建設的な議論ができる。そのためには、実は一番変わるべきは原子力の専門家なのかなと、僕はすみません、出光先生をいじめているつもりはありません。

中村コーディネーター そうしますと、大谷さんがもちろん届ける手段、届ける方法、届け方についての指摘もされましたけれども、受け手の受け取り方ということについても大谷さんは指摘をされましたよね。

そうすると、今の例えば井川さんのお話なんかで、いろいろな人が議論に参加をして問題の設定というのができてくると、受け手も単なる受け手ではなくなって、どこかではまた伝え手の役割を果たす受け手、そういうふうにもなってくると思うんですね。そこら辺からが私たち市民一人一人としてすごく大事なところになってくるんじゃないかなと感じるんですけども、大谷さん、いかがでしょう。

大谷講師 送り手と受け手の関係で「これはいいな」と思った事例をご紹介したいと思います。玄海町にある玄海原子力発電所の敷地には、もともと立派な樺の原生林がありました。ほったらかしになっていた原生林を、原子力発電所の方と地域の方たちと一緒に自分たちで体を動かして樺園を再生して、だれでも散歩が出来るように遊歩道まで作りました。樺は今、ちょうど丸い実がなっているところなんですけれども、その丸い実をみんなで絞って、とれた油で地元の野菜や魚を天ぷらにしてみんなで食べましょうという樺祭りを協働でやり始めました。玄海町の住民が中心になって「日本樺協会」の玄海支部を作り、会員が100名を超えて、日本で3番目に大きな支部になったという話を聞きま

した。受け手と送り手の関係というのは、さきほど出光先生がおっしゃったように、ちょっとした集会をたくさん積み重ねて、お互いに顔の見える距離で深く、深く何が知りたいのか、何が問題なのかという対話をずっと続けていく、継続していくというようなことが一番大事なんじゃないでしょうか。

別の事例を挙げれば、ここは敷地内に大きな植物園もあり、温室も持っているんです。そこで育った苗を学校に持って行って、生徒と一緒に植えることを仕事にしている発電所の担当者が地元にいるんですね。もう一つは、たまたま玄海町にドライブに行ったときに見た光景なんですけど、貝殻を山ほど道路の横にどさっとトラックでおろしていました。いったい何のためだろうと思いました。貝殻はこのままだと産業廃棄物なんですけれども、それを粉にして牛ふんと一緒にして肥料にする。その肥料で野菜を作っている農家を回っている発電所の担当者があるんです。地元喜んでもらう、それを継続していくという発電所の社員が、地元にとってはなくてはならぬパートナーになっているわけです。私は、送り手と受け手というのは双方向でなければならないと思っていますので、どちらか一方だけが発信するのではなくて、受け手である市民側からも、どんどん発信していくというような手段を何とか講じていかないといけないと思っています。今、お話しした事例の場合は発電所立地点の住民の方が相手でしたけれども、これをいかに一般市民に広げていくのかということが、これからの一番の課題ではなかろうかと思っています。

中村コーディネーター 「原子力とくらし」ということで言うと、最初にもご指摘ありましたけれども、例えばお隣の佐賀県の玄海町のような原子力発電所の立地、あるいは原子力関連施設の立地の地域と、それから福岡とか北九州というのは消費地ですよね。しかも地方の大きな消費地、そこでお互いの市民も意識の違うでしょうし、まさに知りたい情報の違いというのも多分そこに出てくるんだろうと思うんですね。

私たち市民参加懇談会は、立地でもやっていますけれども、きょうはどちらかというと消費地の皆さんのお声を伺いたくて福岡でやっているということなんですけれども、第2部の方で会場の皆さんから「知りたい情報は届いていますか」ということでご発言いただきますが、パネリストの皆さんにとって、ちょっと井川さんの場合は仲介伝達者でもあるので、ちょっとニュアンスは違うかもしれませんが、「原子力とくらし」というテーマの中でパネリストの皆さんにとって知りたい情報というと、例えば今何なんですかというのを伺ってもよろしいでしょうか。

小出さん、いかがですか。

小出講師 やはり本当に災害が心配でありますので、そういうことに関してお話は伺いたいですね。

中村コーディネーター 防災というような。

小出講師 そうですね。

中村コーディネーター そうですね。ちょうど福岡県西方沖地震のときは私も福岡におりまして、遭遇したんですけれども、ああいう予期せぬ災害というのがありますよね。

それに対する原子力関連施設についての情報は十分じゃない、あるいは届いてないというふうにお感じになっていますか。

小出講師 そうですね。

中村コーディネーター わかりました。

大谷さん、いかがですか。

大谷講師 私は、調べたいことがあればインターネットで検索します。いつでもどこでもどんな情報でも即座にまとめて見られますので重宝しています。原子力関連施設を見たいと思ったら、「原子力安全・保安院」で見たり、「電力会社」からのを見たり、「原子力委員会」の見たり、いろいろなところをいろいろ開けて見ないと、総合的に私の頭の中に入りません。「原子力」のキーワードで検索したら、それだけで次から次へつながっていくような、そういう分け方もあっていいのではないのでしょうか。

中村コーディネーター お役所はお役所、自分のところの出し方、事業者の方は事業者の方で自分のところの出し方ということですよ。

大谷講師 そうです。しかもどうぞお返事下さいと言われているのも、あまり答えたくないような感じの問いかけ方なんですね。問いかけたくなるような、生活に即した形でいつでも情報がとれるようにしてほしいですね。私は、時間があいたときに何でもとれるということが一番の安心で、そのときに何がとりたいですかと今言われて、今答えたことと明日はまた違うかも分かりませんので、いつでも更新されていて新しい情報がとれるという安心感を盛り込むことも必要ではないのでしょうか。

中村コーディネーター わかりました。

ネットを張って、一つのキーワードで検索すると、次々いろいろなところへ行くという方法もあるんですけれども、一元的に多分原子力の情報をとというのは現実には不可能ですし、一元化するとまた違う問題も出てくるのかなという感じがするんですが、しかし知りたいことを知りたいときに情報としてキャッチできる、もっと使いやすい手段をとるという意

味ですよ。その辺はわかりますね。

出光さんの場合は研究者としての伝え手でもあるし、学生教育をされている伝達者でもあるわけですがけれども、同じ質問をさせていただくと。

出光講師 私が知りたいとすると、例えば今発電してよく九州だと年間発電量の約5割が原子力だというのがありますがけれども、今この時点でどのぐらいなんだろうというのは本当は知りたいんですけども、それを例えば何年か前の東京電力の不祥事のあたりには、電力の次の日の消費状況とかというのがニュースで出たりしていましたけれども、あれが非常に何かおもしろかったんです。これは私のアイデアじゃないですけども、例えば夏の甲子園のあたり、電力の需要が一番高くなっているあたりのときに、例えば今クーラーがこのぐらい使われているとか、そういう情報は難しいかもしれませんがけれども、発電側で原子力が今何%ぐらいで、火力が何%で、電力の使用がふえているから、今火力がこれだけふえているだとか、そういう情報が何かリアルタイムで流れていると、何か使っているなというイメージができていいのかなとか、そういう気がします。

先ほどの話の東電の問題のときには、電力不足のときにはきょうはこれだけで間に合ったとか、そういう話がありました。あれを出すと割と消費している人たちも意識が高まってくると思うんですが、あの後何か最近余りやってなくて、だからあのとき割と皆さんの関心が高まったんだから、何かそのまま続けてもらえればよかったなと思います。そういう多分消費している側は今どの発電で電力が起こされているとか、余り気にしてないと思うんですね。

中村コーディネーター 特に大きな、東京なんかは典型的ですけども、大きな消費地はそうですね。

出光講師 そういう意味では、実は例えば原子力がなかったらどうなるんだという話をそのときにはその話題が出ますけれども、一回聞いたらそれで終わり、多分意識に余り残らないんですね。ところがきょうはどれだけ、きょうの例えば一日でもいいですけども、きょうは何%原子力で何%水力で何%火力で、火力の内訳は石油がこれだけで石炭がこれだけでガスがこれだけでと、きょうは何トン炭酸ガスを出しましたと、そういう発表があってもいいんじゃないかなという気はします。

中村コーディネーター なるほど。

その辺は発電状況やCO₂の排出もそうですね、そういうリアルタイムでいろいろなことが知れるということは、消費者の方の消費行動というか、省エネ行動というか、

そういうものにも何か結びつく情報として扱えるような感じがしますね。

井川さんはどんなことをお考えですか。

井川講師 皆さんのおっしゃるような情報もあれなんですけれども、僕はちょっと新聞記者がどういうことを考えて取材しているかって一つ事例を挙げますと、15年ぐらい前に日本の運転している原子力発電所で炉心溶融事故という破局的な事故が起きる確率というのを国が電力会社に命じて、全原子力発電所で確率を計算させたということがありました。これは各発電所で計算したところ、問題になる数字ではないという報告書だけを出したんですが、個別の発電所の数字というのは出さなかったんですね。これは私も一番知りたい情報でして、当時一生懸命取材したんですけれども、これはなかなか口がかたくて出さなくて、そればかり取材しているわけにもいけないので、そのままぶん投げておいて、それで10年ぐらいたちましたら情報公開法というのができまして、情報公開法でこんなものを隠しているのはけしからんので、ちょっと情報公開請求というものをしてみました。そうしたら、回答期限になったら原子力安全委員会のところでこそっと発表したんですね。そういうことをやった事例があります。

それで、何を言いたいかというと、実は個別の発電所がどういう危険性を抱えているのか、あるいはどういうところを直したら、より安全になるのかというために計算したものですから、本来はそれを公表して、実は議論をして、なおかつこういう対策、こういう弱点が、弱点と言ってもそんな大きな弱点、致命的な弱点ではないわけなんですけれども、安全性をより向上させ得る余地があるということがわかったデータであるならば、そういうのを公表して、実は一般の方にも議論をしておくべきだったですね。そのほとんどの部分が例えば反対派の方なりがこういうことが原子力の弱点だというようなところも入っているわけですから、本当はそういうのは公表しておくべきだった。

今、地震の問題なんかも、さっき災害の話なんかもご指摘されたんですけども、これも阪神大震災以降、安全委員会というのが10年近くにわたって、もともとは旧科学技術庁の原子力安全局というところで最初検討を始めて、それからここ3年ぐらい本格的に原子力安全委員会でもまた検討をしている最中なんですけれども、これは全然結論が出ないままほったらかしの状態、ほったらかしじゃない、一生懸命やっているらしいんですけども、いまだに何ら結論が出てこない。

僕はいろいろ聞いてみたんですけども、結論が出ない理由というのがこれまたよくわからないんですね。実はいろいろな問題があるんですけども、そういった問題設定をして

みると、かなり専門家もきちんと言っているんだけど、例えばホームページで言えばちょっと隅の方に一応触れてますのでそはついてませんみたいな、そういう話がやたらめったら多くて、実はむしろ不安に思うにせよ、原子力は必要として推進するにせよ、本質的にそういう部分の情報、あるいはどういう部分が本来的に議論すべきかというところを見出さないと、実は議論にならないと私は思っているんですね。それで、建設的な議論にならない。

先ほど、またこれも出光先生に怒られちゃうけれども、電力消費という話が消費量が出たという話になりましたけれども、あのときの僕の印象では、むしろあすにも東京で停電するかもしれないぞと大騒ぎしたと。それが停電はやばいよなというので、みんな消費行動が変化したのかなというイメージがあります。逆に停電しなかったので、一部の新聞さんはやっぱり原子力発電所は要らないんだということをおっしゃっているようだけれども、それもどうかとは思いますが、それは多分本質的な議論にはならなくて、僕らは原子力を進めている方々が実はパブリックで議論したがるなことというのをよく勉強して伝えて、なおかつ専門家の方を交えて議論しないと、先ほど来小出さんが地震が不安だ、不安だということをおっしゃっていたわけですが、僕は個人的には地震で原子力発電所が壊れるなら、多分隕石が落ちこちて死ぬのと同じぐらいの確率なので、なくすためにいろいろな方策を考えるというのは、これはより安全性を高めるためにいろいろなことを考えるというのはもちろん重要なんだけど、あした天が落ちてくるかのごとく不安を持ってないんですけれども、これは個人的な受けとめ方とか、いろいろな問題はあるにせよ、そういった不安というのがもやったした不安がずっと残るままで、結局のところ真の理解につながらないんじゃないかというふうに感じている次第で、もう少し伝えにくいことも伝えたらみんなが不安に思うんじゃないかということをもう少し実は原子力をやっている人たちは積極的に伝えなきゃいけないんじゃないかなというふうに日ごろから思っています。

中村コーディネーター 今の井川さんのご意見については、ほかの皆さんいかがですか。

小出さん、何かお感じになりました。

小出講師 何か話し合ってもほったらかしとおっしゃいましたけれども、結論が出ないというようなのを本当によく続けてやれるなとこちらは不思議に思うしかないんですよ。ですから、きちんと個々の分までこういうふうに議論がされているとか、きちっとした途中の段階でも公表をなさるといいのではないかなというふうに思うんですけれども。

中村コーディネーター 大谷さん、いかがですか。

大谷講師 原子力問題に関して言えば、パブリックな場面で議論をしたがらないということを感じています。もっともっと膝詰めで、本音で語るということを原子力関係の方たちにおすすめします。例えば友達同士、それから家族同士、それから趣味の世界の人たち、会社と自宅の往復だけではなくて、そういう別の広がりの方といいですか、仕事人間だけが仕事の間においてパブリックコメントをいただきたいと言われても、本当に建前論でしか答えが出てこない。本音で語り合う、その人数が多いほど違った目が開かれるのではなかろうかと前々から思っております。

中村コーディネーター 出光先生1人が別に原子力関係の代表者としてここにお呼びしたわけじゃないんですけれども、ただ皆さん言われたいろいろなことは公表して、本質的な議論のテーマというものをちゃんと建設的に設定して、そして議論をすると、議論を公開していくということは大事ですよ。それは多分原子力の技術者の人も、事業者の人も、研究者の人も、基本的なところではそういう希望というか、願いを持っていらっしゃるんだと思うんですけれども、いかがでしょう。

出光講師 情報を伝えるというのは非常に難しくて、何を公開する、しない、昔隠しているという話が出たりしますけれども、隠している気持ちがあって隠しているのもあるかもしれないんですけれども、私が今まで経験したのでいくと、「こんなまで教えなきゃいけないかったの」というのもあります。ちょっと公開の仕方、どこまで話をしなきゃいけないのかというのがなかなか難しいところかなというふうに思いました。

あとは話し手、受け手の話もあります。例えば何か事故なり故障なりがあって、被ばく者が出ましたというときに、この被ばくはどのぐらいのレベルですよというのは、確かに数値では書いてあるんですけれども、それがぴんとこないところが多分一番大きいのかなと思うんですね。新聞記事に載って、これだけ被ばくがありました。これがよく書かれているのは、事業者側によると、これは健康に問題のないレベルですよというふうに終わっているんですね。その読み方はいろいろとりようがあって、事業者はそう言っているけれども、おれは信じないぞという書き方なのか、そう言っているからそう信じますと言っているのか、そこが読めないというところがあるんですね。

それはその記事を読むと、読んだ人はそれぞれ自分のいいようにとるわけですね。多分反対している、心配になっている人は「事業者はそう言っていると書いて、そこでとまっていると、これはそうは言っているけれども、信用できないんじゃないか」ととらえるだ

ろうし、安心して側は事業者が「健康レベルに何ら問題はありませんと書いている。ああ、それでいいやと思っている。」同じ記事でもとらえ方が全然違うと思うんですね。

それを客観的にちゃんとどういうレベルかと、読んでいる人たちが判断できるかどうかというところが多分大事なところだと思うんです。例えば周りにどちらかというと慎重側、心配性の人がいると、危ないんじゃないかというふうにとらえるだろうし、周りに例えば被ばくのお話とかを知っている人がいて、これぐらいの被ばくは日本で住んでいる人が大体年間に浴びる量の何分の1だよとか言えば、何だ、そんなものかと思うだろうし、そこから辺の追加の情報、それがその場で与えられるか、与えられないか、それで後の話が随分変わってくると思うんですね。

そこが例えば学生とか、身近にいる人だと、この量はこうだよと、そういう話ができますけれども、例えば全然見も知らぬ人が新聞記事を読んだだけで、これは危ないのか、危なくないのかというふうに話を直接聞かれば答えられますけれども、聞かれない場合にそのままこれは危ないと思ったら、信じ込んで、そのままイメージとして残っていったらうんですね。そこから辺が情報の伝達の仕方の難しさだと思うし、どうやってフォローしたらいいのかというところで解決策が出てこないところだと思うんです。

中村コーディネーター 井川さん、どうぞ。

井川講師 まさに、今、出光先生のおっしゃったのは非常にいい例でして、新聞によっていろいろ書きぶりが実は違うんですね。そういうふうに、例えば放射性物質がちょっと漏れると、実はもともとないところに放射性物質がほんの微量でも漏れると、ほとんど通常より1億倍とか2億倍と書く新聞もあるんですね。

それで、うちの社内でも一時大もめにもめたことがあるんですが、僕はもともとないところにちょっと出たら1億倍とか2億倍というふうを書くのはいかなものかというふうに言ったんですけれども、実は毎日新聞が1面トップで1億倍というふうに書いてあったので、インターネットで見たうちのえらい人が毎日新聞も1億倍でいっているんだから、うちも1億倍って書かなきゃだめじゃないかと言うんですけれども、ちょっと待てよと、これはなめても多分死なんぞというふうに僕は言ったんですけれども、それぐらい物の書きよう、表現ぶりで確かに違うんです。違うんだけれども、先ほど来申し上げている何かあったときに、もっと知りたいと思った人がアクセスして、あるいは知りたいと思った人がより本当に大丈夫なのというのを身の回りに聞くんじゃなくて、それを例えば電力会社で起きた事故であれば、本当の広報をたどっていったって、何シーベルトですよと書いて

あるだけなんですよ。この何シーベルトはどのくらいなのかということまで紹介しているプレスリリースさえないんですね。

実はやっている方々が何かこういうことをきっと疑問に持たれるだろうとか、今おっしゃったような例なんていうのは典型的な例だから、きっとこういうことを一般の人は疑問に持つだろう、こういうことを不安に思うだろうということを取って、インターネットなんてそれこそリンクしていろいろな情報というのを照会できるわけですから、そういうのに先取りして答えられるようにしておいて、新聞というのはいろいろなスタンスによって、あるいは記者の感性、先ほど淡々と伝える電気新聞を出されていましたが、これはまさに電気新聞は淡々と伝えるための新聞なので、普通の新聞だと読売と朝日と毎日、全国紙だけですけれども、ここだと西日本なんですかね。新聞によって全然伝え方が物によっては違って来る。それが一つの事実でも、確かに1億倍はうそじゃない。うそじゃないけれども、1億倍と書けばすごいことのように思えるんだけれども、実は大した量じゃなかったりなんかするという差があるので、むしろ伝える側がもっと知りたい、もっと不安だと、あるいは何か疑問に思ったぞというときに、先回りしてどんどん答えられる、あるいは追加で出てきたものに遡行できるような体制というのをきっちりつくらなきゃ、国も安全規制当局も電力会社、あるいは事業者、あるいは大学等もつくらなきゃ本当はこれからの原子力に対する本当に知りたい情報に答えられないんじゃないかなというふうに思う次第です。

中村コーディネーター 大谷さんはうなずいていらっしゃるんですけど、今の井川さんの、まさにそういう感じですかね。そこは非常に大切なところだと思いますよね。

それで、確かに伝えにくいとか、できればそこまでは伝えなくてもいいんじゃないかと判断したい情報とかって確かにあるんですよ。でも、知りたい側が何かの一つの情報から一歩踏み込んで、それこそ積極性を持ったときに追加の情報とか、出光先生が言われたようなこのピースからどんな全体像を思い描けばいいのというところへアプローチできる情報の出し方とか、そういうものというのはとても大切で、きょうのお話を伺っていて、少なくともパネリストの皆さんはその辺にこの情報伝達のポイント、問題点、あるいは課題というのがあるというふうに共通認識を持たれたのかなというふうに感じました。第2部の方で、会場の皆さんがこれまたどういうふうに感じていらっしゃるかを伺ってまいりますけれども。

それと、もう一つ出光先生がお話しされた中で、例えば環境をテーマにしてお話をする

とか、講演会をするとか、何か催しということになると、非常に幅広く関心を持って集まってくるけれども、それが原子力について、より深く知りましょうというような呼びかけだと、なかなか集まらないというのがこれは確かに現実ですよ。ところが環境というテーマでお話しする中で、CO₂のことも出てくるかもしれないし、原子力発電のメリットというのでも出てくるかもしれないし、そういう中でなら受け手の方も受ける許容度があるというか、最初から排除しないで、とにかく自分の関心のある環境という入り口なら聞いてみようかと、これは現実として確かにありますよね。

そうすると、伝え手というのもそのあたりを考えて情報提供の場というものを築いていかなきゃいけないし、受け手の側も自分が関心を持ったテーマからどこまで広がっているいろいろな情報を正しく知ることができるのかという、その辺の作業というのは努力も必要ですよ。情報が、情報がと言っても、漫然と構えていたんだったらホームページだって見られないし、ファクスだって来ないし、Eメールだって来ないしというのが多分現実で、そのあたりを私たち一人一人が受け手としてどうとらえていくか。その受け手がまた周りの人とか周辺の人、家族なんかに対する伝え手にもなり得るわけで、その辺をお互いにもっと考えていくというところから建設的な原子力に対する情報論というのが育っていくのかなという印象を持ちましたが、第1部の方がそろそろ時間が参りましたので、パネリストの皆さんにもう一言ずつ、きょうここでぜひおっしゃりたいというご意見を伺って、第1部の方を終わらせていただきたいと思いますけれども、先ほどと同じ順番で大谷さんから。

大谷講師 「知りたい情報は届いていますか」ということで、届いているというところ、届いてないというところまでは話がありましたけれども、例えば「届けましたよ」といった後に、それではそれを受けとめた方がどう感じたのかなというようなフォローの体制がどれぐらいできているのか、ということもまた大事なことでないでしょうか。受け手である私たちも考えておかないといけない問題だと思っております。

中村コーディネーター ありがとうございます。

それでは、出光さん、どうぞ。

出光講師 それでは、先ほどの話もありましたが、環境だと話を聞きに来やすいけれども、原子力だとなかなか聞きに来ないということがあります。環境の方の公開講座は実はお金を取っておりまして、お金を払ってでも聞きに来るという方がいまして、その中の一部で原子力の話をしているので、多分お金を払っているから聞かなきゃ損だと思って来ら

れているかもしれないです。あと原子力学会とかでやっております講座、これは無料でやっておりますので、ぜひ無料のやつはただだから、中身も無に等しいとは思わずに聞きに来ていただければと思います。

中村コーディネーター ありがとうございます。

小出さん、どうぞ。

小出講師 やはり原子力だけを単品に扱うのではなくて、私どものイベントの中にそういうお話を盛り込んだりとか、本当にそういうことが必要なと思います。本当に原子力については、もう暮らしを見直すしかないと思います。

中村コーディネーター 消費の暮らしですね。

はい、ありがとうございます。

井川さん、最後になりましたが。

井川講師 環境の話を皆さんおっしゃるので、環境の話を一言だけ。

グリーンピースという過激な反原発もやっている団体がありまして、その創設者の1人でムーアさんというんですけれども、カナダに住んでいるんですけれども、この人はその後グリーンピースをやめまして、今原子力は世界に必要なだというようなことを盛んに強調していて、アメリカの議会とかでも証言したりなんかしております。多分、身近な環境から地球環境まで考えると、原子力の位置づけというのはいろいろなご意見はあると思うんですけれども、幅広くその国のそれぞれエネルギー事情だの、あるいは生活だの、産業だの、いろいろなことを考えて、あるいは隣の国、周囲の国まで考えて議論しなきゃいけないので、恐らくそういったことも今後は知りたい情報の中に入れていくという観点は重要なんだろうなと思います。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

まだまだお話は尽きないかと思いますけれども、第2部の方ではこの第1部を踏まえまして、会場の皆さんからいろいろな角度から「原子力と暮らし」について、「知りたい情報は届いていますか」というテーマでご意見をお伺いしたいと思っております。挙手をし、皆さんに私がご指名いたしますので、発言をしていただく形になろうかと思います。

ここでちょっと休憩をとらせていただきますので、その休憩の間に発言される内容などを考えておいていただければ幸いです。

お手洗いの時間なんかも考えて、15分ぐらいとりたいと思いますので、3時25分ぐ

らいには再開をしたいと思います。それまでに席へお戻りください。

それでは、第1部のパネリストの皆さん、ありがとうございました。これで第1部を終わらせていただきます。

「第10回市民参加懇談会」 第2部 議事録

日 時 : 平成17年9月26日(月)13:30~17:00

会 場 : アクロス福岡「国際会議室」

事務局 それでは、時間になりましたので、再開させていただきます。

会場の皆様方からご意見をお伺いしたいと存じます。

ご発言をご希望の方は挙手いただければ、司会がご指名いたしますので、ご足労ですが、お近くのマイクのところまで来ていただき、ご発言を頂戴したいと存じます。その際には、お名前とどちらからお見えか、またできましたらお立場を頂戴したいと存じます。

なお、多くの方々のご意見をお伺いするために、ご発言は3分をめどに簡潔にお願いいたします。ご発言が3分を経過したところで鈴で合図させていただきます。

それでは、これより先も引き続き中村浩美委員、よろしくお願いいたします。

中村コーディネーター お待たせいたしました。

それでは、第2部は皆さんからご意見を伺う場です。コアメンバーも並んでおりますので、ご発言の内容について、より深く理解を深めたいということで、コアメンバーの方からご質問するケースもございます。よろしくお願いいたします。

それから、1部の方のパネリストの皆さんに対するご意見なりご質問なりというのもお受けしたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、挙手をしていただければ私がご指名いたします。ご意見のある方はどうぞ。

参加者(深江) 北九州から来ました深江といいます。

ご意見が届いていますでしょうかということですので、届いていないということを3点ぐらい話したいんですけども、3分という制限がありますので、とりあえず後でまた発言の場がいただけるということを前提に1点だけ発言をしたいと思います。

きょうはプルサーマルの問題で、賛成、反対の意見を聞くところではないということですので、情報が届いていないという中身について1点話をしたいと思います。

プルサーマルの安全性について、海外実績というのを盛んに電力会社や政府の方は宣伝をしているわけですね。マスコミを通して、先ほどの電気新聞の話もありましたけれども、許可された記事の中でありましたけれども、そういう案内の中で海外に4,000体であるとか4,500体の実績があるということが盛んに宣伝されるわけですが、九州電力がやろうとしているプルサーマルというのは、世界に例のない非常にたくさんの

プルトニウムを含んだMOX燃料を燃やそうというやつなんですけれども、ふとそういう情報を読むと、海外で4,000体、あるいは4,500体あるプルサーマルというのが九州電力がやろうとしているものと全く同じなんだという非常に大変な誤解を皆さんしてしまうわけですね。本当に九州電力がやろうとしているプルサーマルというのが海外で行われた実績と同じなのかということの一つ一つ調べていくと、全く違うというところにぶち当たるわけですね。では、その安全性というのは一体どこで実証されているのかということと、ずっとこれも探していくと、実はされていないというところに突き当たります。

知りたい情報を何が知りたいかということ突きとめていくと、勉強しないといけないという話がありましたけれども、まさにそのとおりでありまして、私たちがつい最近までプルトニウムを一体どれだけ燃料の中に含むのかというのを調べてくださいというのを佐賀県の方にお願いしに行きました。これは電力会社にも何回となく、どれだけ海外実績というのはプルトニウムを使っているのかというのを聞いておりますけれども、一度も回答が来ておりません。

佐賀県は7月11日に私たちの質問に対して回答書を出しましたけれども、資源エネルギー庁に調査を依頼しましたけれども、わからないという回答でした。でも、しかしこの質問書を私たちが佐賀県に出したときは既に私たちは自分たちで調べて、海外実績であるプルトニウムの量というのは調べていたわけですね。私たちが調べて調べられる中身が佐賀県が国に申請して、その返ってきた答えがわからないということなんですね。これがいわゆる閉ざされた原子力の世界であります。

その中で、私たちはそれが安全であるかどうかということを実証していかないといけないんですけれども、この場にいる人たちにまず紹介したいと思いますけれども、今から本題に入るんですけれども、こういう時間制限があると辛いですね。簡単に言います。玄海は6.1%のプルトニウムを使いますけれども、豊富な海外のプルトニウムの濃度というのは3%から3.7%、半分しかプルトニウムを使ってないんですね。これで本当に安全なんでしょうかというところがあります。ちょっと時間が来たので、また後で発言します。

中村コーディネーター ご発言の趣旨はわかりました。ありがとうございます。

また後で時間がありましたらご指名します。

ほかにご意見ある方どうぞ。

参加者（野口） 福岡市から参りました野口博子といいます。

消費生活アドバイザーなんですけれども、私どもの消費生活アドバイザーの会で、先日

知りたい情報ということで、今知りたい情報でプルサーマルがよく取り上げられているのでということで、九州電力さんと電気事業連合さんに来ていただいて、お話を聞く機会がありました。

そのときに、やはり資料だけではなくて、いろいろ直接その場でお話ししていただいて、質問のやりとりをするということでよくわかったんですが、実はその参加された方の感想の中にプルサーマル以前にちょっと原子力のことについてなかなか知る機会がなかったということで、原子力のメリットというのを自分が知らなかったとおっしゃったんですね。例えば、CO₂の排出がないとかというようなメリットというようなことは、なぜ出されないんですかって言われたんですね。出していますということで、どうしても情報を出しているんだけど、伝わってないということがありました。

ですから、消費者もみずから情報をアクセスしないといけないんでしょうけれども、割と新聞とかマスコミで入ってくる情報は事故だとか危険だとかといった情報で、体系的に原子力のことを知る機会というのがなかなかないんじゃないかと思います。ですので、知るといえることで言えば、自分から知ろうと思ったときにはちょっと専門的過ぎるような情報がホームページ等であったりということで、先ほどから何度でも出ている原子力のことならどこに聞けばいいのか、特に一般の人がわかりやすい情報というのがどこにあるのかというところで、そのところで消費者自身が原子力のことを考えることができるような情報提供というか、自分の生活の中に落して考えられる、先ほどから省エネだとか、あとシーベルトでどれくらいだったら影響があるだとかとおっしゃったような、そういう具体的なところでの情報提供をしていただければ、知りたい情報として届けられるし、それについて見た人もまた原子力について関心を持つんじゃないかと思います。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

コアメンバーの皆さんいかがですか。先ほどの深江さんのご発言と、今の野口さんのご発言ありましたけれども。

では、吉岡さんどうぞ。

吉岡委員 今の話と直接関係するかわからないんですけども、私としては市民参加というのは市民参加したいやつがすればいいという、基本的にそういう立場です。一方、知りたい情報は届いているのかというのは、知りたい人が、切実に知りたいことがある人が、来て議論をすればいいというふうに実は思っていて、第1部についてもその点では若干不

満があります。井川さんが極めて適切に、知りたいことがわかるためには物すごく勉強しなきゃだめで、そのためには批判的立場の人というのは物すごく勉強し、しかも表現が特別にうまいからいいんだとおっしゃいました。そういう人々の知りたいものにもし答えられるならば答えることによって、原子力推進サイドも認識が深まるんだという、そういうことをおっしゃっていたと思うんですけれども、まさにそのとおりで、だから私としては批判的立場の人でも第1部のパネリストに加えると主張して、議事録には何度も書いてあると思いますけれども、周知のことですけれども、実らなかったの、その点は私としては若干不満ですけれども、せいぜい盛り上げていただければありがたい。その点から言えば、深江さんの最初の質問というのは、問題提起としては非常に意味があったというふうに思います。私たちは答えられる立場にないんですけれども、知っている人たちに情報提供をお願いするという、そういう対応は、仲介者としての対応はできると思います。

中村コーディネーター　まさに、深江さんが知りたい情報というのは明確にご発言になったと思います。

新井さん、どうぞ。

新井委員　2番目の方のご質問といたしますか、お話に関してちょっとだけ話をさせていただきます。

私、一応エネルギージャーナリストとしていろいろなものを書いたりしているわけですが、実はある大学でエネルギー論という講座を持っておりまして、もう何年たちますか、七、八年この種のエネルギー講座を持っております。これは原子力だけをやっているわけではありませので、石油もLNGも石炭も全部話をするんですが、理科教育の崩壊とかいろいろ言われていますけれども、そのとおりでして、原子力の話をしみると、そのメカニズムのところで大学生の半分ぐらいが理解ができません。核分裂を理解できるという人がどうにか半分程度ですね。3時間ぐらいかけてやるんですが、それが結果としての現状です。

それからもう1点、こちらは九州、石炭で有名でしたけれども、大学生100人ぐらい聞きますと、石炭に触ったことのあるという学生が三、四人ですかね。石炭を見たことがあるという人が1割ぐらいで10人程度ぐらいでして、やっぱりひとつの情報を伝えるという意味合いで言いますと、もちろんこうした場も重要なんですが、教育という問題が大変重要なのではないのかなと私個人も思っておりまして、2番目の方の話に多少コメントを言わせていただきました。

中村コーディネーター 碧海さん。

碧海委員 深江さんに一つだけ質問をさせていただきたいんですが、先ほど海外でやっている場合は3%というお話がありました。海外というのは具体的にはどこを指しているの、それだけで結構です。

参加者（深江） すみません。フランスが3から3.7ですね。ドイツが3.1から4.6です。

碧海委員 ありがとうございました。

中村コーディネーター はい。

では、また会場の皆さんから伺います。では、私の正面の女性。

参加者（村山） 福岡市の村山由香里と申します。仕事は、働く女性向けの情報誌を出版しております。

働く女性たちというのは私も含めですけれども、電力とか原子力とか、ほとんど余り興味がないといいますが、わからないという人たちが多いのではないかと思います。井川さんの何が知りたいのかわからないんだと、知りたいのがわからない、難しいんだというご意見にちょっと勇気づけられて出てまいりました。

今日おいでの会場の皆さんも、それから皆さんすごく勉強されて、とても興味のある方たちばかりだと思うんですね。では、世の中の半分以上ぐらいの方たちは余りよくわからないというふうに思っているんじゃないかと思います。それをよくわからない方たちがどう思っているかというと、何となく怖い。その何となく怖いというふうな方たちは、先ほどの2番目の発言の方も言われましたように、ニュースだとかには何か事故が起きたとか、そういうことばかりが出てきますので、話題にするときというのは例えばニュースを家庭で一緒に家族で見ながら「怖いね」とかいうふうな、そういうところでしか出てこないと思うんですね。この新聞を見ても、やはり「関電、東電とも事故や不祥事などの影響で、実現に至っていない。」というこの最後の言葉だとかを見ると、「ああそうだね、危ないんやね」みたいなところで、何か本当に危ない情報とかで、もやもやふらふらしているような気がするんですね。そういう人たちに、まずは関心を持ってもらうことが一番大事なんじゃないかと思います。

関心がすごくあって勉強されている方たちは、ネットだとかいろんなところでお調べになって、そして先ほどきちんとした答えが出てこないとか建前論でしかないとか、一番目の質問に出られた質問とか、そういうことに対する答えは、例えば電力会社の方のホーム

ページとかでQ & Aとかで答えるとか、そういうふうなことがどうかなと思うことと、それから先ほど電力で、原子力が50%ぐらい、九電は47%と聞いていますけれども、火力発電が何%とか、そういうふうなのが、先ほど出光さんがおっしゃったように、例えばテレビの天気予報のように毎日のように出してくれば「ああ私たちが今こうやって使っているのは、ぱちっとすればすぐつく電気だけれども、どこから来ているんだ」という認識ができる。だから、毎日毎日電力がどうやって送られているかということを考えるような、そういうアプローチというふうなところも必要なんじゃないかなと、興味のない人たちに興味を持たせる、勉強させる最初の第一段階の機会のきっかけというのも必要なんじゃないかと……

中村コーディネーター きっかけづくりですね。

参加者（村山） ですね。

以上です。

中村コーディネーター ありがとうございました。

今の村山さんのご発言について、何かありますか。ありませんでしたら、会場の皆さんにします。

では、続いてそちらの女性、お願いします。

参加者（山中） 福岡市から来ました山中と申します。

私も昔は全く原子力のことがわからなくて何も知りませんでしたけれども、チェルノブイリの事故があってから身近に感じて、少しずつ少しずつ勉強をし始めました。さっきおっしゃったように、この電気がどこから来ているのかというご質問などあります。それをメディアが流されるときに、ぜひしてほしいのは、原子力のできるのが原発からじゃなくて、どこかの国のウラン鉱山からウランを取り出して、たった1ペレットを出すために何トンという放射性廃棄物をその地域に置いている、私が使っているこの電気のために、最初にどれだけの放射性廃棄物が知らない国の遠くの人たちのところに放り出され、そしてその使った後のごみがさてどうなるか、まだ全然わかっていないというところまで、すべてをクリアに出してほしいと思います。

あと2つか3つあるんですけれども、木元さん、何年か前にすそ切り処分ということがありましたよね。クリアランスレベル、放射能で使われたいろんなもの、放射能持っているものを生活の中に出していくんだけれども、そのためにこれぐらいの放射能だったら大丈夫というのがあって、そのためのご意見をお聞きしますということがありましたよね。

私、それ「ええ、怖いな」と思ったので意見を出したくて資料を請求したんです。そうしたら、そこのおじさんが「ええ、ファクスも持たないの。ほれ、ちょっとファクスも持たない人が意見言いたいんだって。その女の子、住所聞いといて」その人の名前ももうばっちり頭に入っていますけれども、そんなことがありました。その女性がすごいすてきな人で資料を送ってくれて、その資料を見て意見を出すことができましたけれども、意見を聞きたいんだろうか本当に国は、と思いました。

木元座長 ごめんなさい、国の人。おじさんとおっしゃったけど。

参加者（山中） おじさん、国の人だと思います。

中村コーディネーター 名前はいいですけども、国のどういう部署に。

参加者（山中） だから、そのクリアランスのときの……

木元座長 クリアランスレベルについて、資料はいろいろあるんですよね。だから、それをお送りすることはすぐできるんですけども、ご意見やそういう質問があったわけですね。

参加者（山中） はい。ファクス持たないのと、「ファクスで送ろうか」と言うから「いや、うちファクスありません」と。でも、あのときインターネットの話までしたかどうか覚えていませんけれども、「ええ、ファクスもないの。ちょっとそこの子、ファクスもない人が意見書きたいんだって。住所、名前聞いといて」でした。

木元座長 後で名前教えてください。ちょっと調べてみます。

参加者（山中） ただ、そういう体質みたいなのがあって、反対の人たちとか口うるさい人の意見は聞きたくないというのがあるなというのは、常々思っています。だから、こういうところに来るときも、本当はすごく嫌なんですけれども。やっぱりご意見言える機会は言わなくちゃと思って、一生懸命来ています。

木元座長 ありがとうございます。

参加者（山中） また後にもありますけれども、とりあえず3分なので、これで。

中村コーディネーター はい、ありがとうございました。

ほかにご意見の方。どうぞ、手を挙げていただければ。そちらの女性。

参加者（河端） 福岡市から来ました河端と言いますけれども、私、同じくご意見をクリアランスレベルではなくて、原子力委員会が意見とか質問を募集したんですよね。それは再処理工場をどうしたらいいかということで、1年ぐらい前だったと思いますけれども…

…

木元座長 それは、核燃料サイクルについてでしょうか。

参加者（河端） そうだと思います。それで、再処理のことをすごく検討されているみたいだから意見を出したんですけれども、そのときに「意見でもあり、これは質問です」とお書きして出したんですけれども、ネットで出したんですけれども、その質問に対する答えは全くいただけていないんですね。

木元座長 ネット、ホームページに出していただいて、それは公開されていますよね、お出しになったご質問は。

参加者（河端） いえ、何か意見として出した文を一回検索をしたときに、意見として出した文は、再処理動かさないでくださいというような意見を一回出したことがあって、そのときはやっぱり健康ということを計算の中に入れられていないから、やっぱり例えばイギリスとかドイツとかの再処理工場の周辺で放射能汚染があって、白血病の子供がふえていて、イギリスとかではそれは政府も認定しているということを何かの資料で見たものですから、そういうことをちゃんと考えて、例えばそのデータをもとにすれば白血病がどのくらいふえて、どれだけの子供が犠牲になって、そのためにお金に換算したりするのはよくないと思うんですけれども、補償ということまで考えてそれは計算されているんですかということを、それまで本当は考えないといけないんじゃないんですかということをして「意見でもあり、質問でもあります」というふうに書いて出したんですけれども……

木元座長 それはセラフィールとか何かの、ある種の団体がお出しになっていらっしゃるデータとしてお出しになったの。それともイギリス政府がお出しになっている……

参加者（河端） イギリス政府はその被害を認めて、裁判で認定されたんですかね。

木元座長 いや、されていないと思う。

中村コーディネーター いや、裁判では認定されていないんじゃないかと思います。

木元座長 それをまたお問い合わせをしたのかもしれない。私は確認していないんですけれども。

参加者（河端） それにしても、例えばあなたのその情報は政府の出している情報ではないから無理なんだとかですね……

木元座長 そうね、それをお答えしなきゃいけない。

参加者（河端） そういう答えをいただかないと、非常に一体一生懸命書いて……

木元座長 それもお答えしていると私は思っているんですが、ちょっと調べてみますね。全部ファイルされていますから。

参加者（河端） だから、そういうふうなことがあって、非常に何か、だから市民参加懇談会というのをされるのは、木元さんがそういうふうにしてくださったのはありがたいんですけども、もっと大もとのところでそういうこともされていないのに、何が市民参加懇談会だろうかというふうに、ちょっと思ったものですから……

木元座長 ここは大丈夫ですけども、アクセスしてくださったホームページの係がどう処理したのかよくわからないけれども、ちょっと調べますね。それはご無礼しています。

参加者（河端） だからそれもあつたし、あと私も佐賀県の方にも不安だったから、ブルサマルのことでも質問したんですね。そうしたら、県が持っている資料はこの分だけですというのはいただいたんですけども、さっき深江さんの方から出ていました、詳しいプルトニウムの富化度とか、そういう海外の実績の……

木元座長 実績の検証みたいなもの。

参加者（河端） その詳しい、安全だと言っている根拠をどうしても、やっぱり私は福岡ですけども西の方に住んでおりまして、本当に普通風下なんですね。いつも大抵西から気候が変わってきますから、風下に住んでいるものですから、福岡のことはちょっと意見というのは聞く機会がなくて、佐賀県の意味で決定されるものですから、佐賀県の方にそういうこともあって質問を出したんですけども、同じく回答は不満足なままでしかいただけていないです。

木元座長 不満足だということは、またお出しになった。

参加者（河端） いえ、もうちょっと、私も忙しかったから、一応そこまでは出したんですけども、その後また機会があればと思って……

木元座長 今度中村さんが司会なさるシンポジウムがあります。玄海でしょう。

中村コーディネーター 玄海。でも、僕がやるのはエネ庁の方の必要性、今度の2日ですね、玄海町でやります。保安院の方が安全性についてのパネルディスカッションをやって、多分会場からでもご質問を受ける形をとるんじゃないかと思いますけれども、それはちょっと僕がやるやつじゃないのでわかりませんけれども。

参加者（河端） 佐賀県で、一度九電が公開討論会をされたんですよね。

中村コーディネーター ええ、そうですね。

参加者（河端） そのときも行きたかったんですけども、福岡在住ということで断られているんですね。

中村コーディネーター そのケースは伺っています。それは木元さんもお存じです。

木元座長 私が司会をしましたから。

参加者（河端） そういう、だから国のも玄海町のも玄海町とその周辺と伺っていますし、本当に機会がきょうぐらいしかなかったものですから。

中村コーディネーター それで、実はきょうは、福岡でやろうということで我々伺ったので、玄海町でやらずに福岡でやった意味というのは……

木元座長 そこなんです。

中村コーディネーター まさにそうなんです。

参加者（河端） もちろん意味はあると思うんですけども、結局安全だという情報が垂れ流しされているだけなんですね。だから、聞きたいことが全然与えられていないというふうに感じています。

木元座長 と思っていらっしまった。

参加者（河端） いや、思ってるじゃなくて、実際にそうです。実際に答えが来ませんということと言いたかったんです。

中村コーディネーター はい。ご発言の趣旨はわかりました。

ほかに、どうぞ挙手をお願いします。では、そちらの男性。

参加者（藤原） 福岡市の藤原と申します。よろしくお願いします。

「知りたい情報は届いていますか」というテーマだったので、実は一児の父ですので、子供とかに質問された場合、答えないといけないんですね。自分でわからないことはネットで自分で調べて、子供に答えないといけないと思うんですけども、ネットで原子力とかの関係で調べたとき、情報を探そうとしたときに、多分皆さんのご努力の結果だと思うんですけども、物すごい量の情報がヒットしてくるんですよ。これは、原子力ナビとかもあるんですが、余りにも難しい、余りにも情報が多いものですから、なかなか私たちが欲しい情報まで行き着かないと、あり過ぎて行き着かないというところがあるかなとすごく感じています。

議論にあったように、個々のトピックス、今ホットの話題はプルサーマルとかなんでしようけれども、個々のトピックスについては詳しく書いてあったりするんですけども、では原子力と全体という問題で、こうなっていくんだよとかいうふうな、全体の流れとかを簡単に詳しく、簡単に書いてある情報というのを探すというのはなかなか難しい、埋没して難しいかなとすごく感じています。内容は、正確に発信されていらっしゃると思うんですけども、その内容が物すごい難しくて、僕ら大人が子供にそしゃくして伝える

のも結構難しいかなというふうに思っています。

原子力に関して、もう皆さん漠然と不安があるかなと思うんですけれども、それというのは理解ができていないから不安につながるのかなとすごく思ったりして、やはりこういう懇談会とかでもそうなんですけれども、原子力の不安とかを払拭するためにも、例えばすぐ僕が子供に教えてあげるように、わかりやすい情報とかを手が届きやすいところに置いていただければなと。ネットであれだけの情報が出たら、なかなかすぐ回答できないというのが、子供に回答できないがあるので、そういうふうにしていただきたいなというふうに思います。

以上です。

中村コーディネーター 今の藤原さんのご発言について、吉岡さんいかがですか。

吉岡委員 大学教師の立場から言うと、先ほど井川さんが大学教師は核分裂から丁寧に教えないと学生はわかってくれないと信じ込んでいるという、そういう議論が出たんですけども、私は経験的に申しますと、大学1年生には核分裂からきちんと教えます。ところが、文科系だけで過ごして来た大学院生、割合年を召された方も多い、この人たちには核分裂から丁寧にというのはあきらめています、そうじゃなくても原子力わかるんじゃないかと。

今まで10年ぐらいの経験で、それなりに教え方というのを身につけたつもりですけれども、核分裂という言葉や大まかな概念あるいは数種類の元素の、あるいは核種の性質や記号とか、そういうものは教えるんですけども、ミニマム基本的な知識を身につけてもらって、あとは社会的、政治的な問題について深めてもらうという、そういうやり方が何とかできるようになったと自負しております。その際に、やはり教育というのは例えて言えば、各自の情報処理装置の性能を高めるということであって、これは情報が周りにあっても処理装置がちゃんとしていなければ全然理解できないという、多くの人はそういう状況に置かれていると思うんですけれども、その処理装置を開発するためには、やはり直接、できれば少人数で、ある程度知っている人も含めてゼミ形式で議論するという、そういう双方向の機会を持たなきゃやはりだめだろうと思います。直接原発に行くということもあるかもしれませんが、それだけでなく、できるだけ多くの直接学び、教え、お互いに深め合うという、そういう場が絶対必要であるというのが私の見解で、できるだけ私個人としてもそういう場をつくりたいと思っています。

中村コーディネーター でも、藤原さんのような方は、ではそういう場にどうやって参

加したらいいのかということも多分あって、ネットというのはいつでも自分の好きなときにアクセスできるから、やっぱりネットなんかで、おっしゃる手の届きやすいところに知りたい情報があってほしいという皆さんの要望というのは、これはやっぱり正面から受けとめなきゃいけないんですけども、ではどういう装置をつくればいいのかというのは、またすごく難しい問題なんだろうと思いますけれどもね。

木元さん。

木元座長 今の藤原さんのご意見なんですけれども、私も感じているんですよ。もう探れば探るほど、やたらいっぱい出てきてわからなくなっちゃう。例えばの話、藤原さん、どこかに子供のための原子力コーナーみたいなものがあると、アクセスして入っていきやすいということはありますか。そういうことは考えられますか。

参加者（藤原） そうだと思います。各電力会社さんにあたりするのも拝見しています。原子力ナビとかも見たこともありますし、ただそれは僕らが知っている、僕が偶然探して知っただけで、ではヤフーで検索して「原子力」と入れたらだあっと出てきて、では一番初めに原子力ナビの子供のコーナーがあるのかとかいう部分というのはわからないだろうなと思うんですよ。

ごく一般の話でいけば、そこから、では子供に説明できるような情報をとって説明するとか、子供はプルサーマルの話は聞きませんから、原子力一般の話か電気の話とかしかしませんが、そういう部分は、やはり入る入り口を大人、僕らが見つけて子供に説明するとかという部分をちゃんとしないといけないかなというのは思っているんですけども。

木元座長 思いますよね。お子さんお幾つですか。

参加者（藤原） 5歳ですね。

木元座長 ちょうどいいですよ。

参加者（藤原） ちょうど電気の話とかの質問があるので。

木元座長 出ますよね。ごめんなさい、もう少し言わせてください。

うちの次男 成人して家庭も持っていますけれども、今原子力発電所で働いているんです。彼の方が私より先に原子力を知っているんですよ。どういうことかということ、昔、絵本で「原子力の話」というのがあったんですね。作家で言えばジョージ・ガモフという人が書いた子供の本がありますけれども、その本はとてもわかりやすかったんですね。だから、例えばそういうところから入って行って、後は自分が知りたいものを知っていくと

いうことは可能かもしれないので、そういうものがネットにあると、子供も検索できますよね、自分で大体わかってくれば。

すみません、碧海さん、少しフォローして下さい。

中村コーディネーター 建設的な提案ありがとうございました。

碧海委員 今回の藤原さんのご意見に関連して、例えば原子力の専門家であるとか関係者、電力会社、そういう方たちがつくっていらっしゃるホームページというのは、やっぱりどちらかと言えば、私はある方向性があると思うんですね。私がお勧めしたいのは、例えば学校の先生方のグループで、エネルギーとか原子力をテーマにして、いろんな活動をしていらっしゃる方たちとか、それからちょっと宣伝めきますが、例えば私が参加しているウイメンズ・エナジー・ネットワークというのは、女性の、それも原子力側ではなくて、私なんかもまさにそうなんです、中間的な立場で原子力とかエネルギーについて、一般の人たちとのコミュニケーションのパイプ役をやると、そういったような立場の人たちのホームページみたいなものをなるべく利用されるといいんじゃないかと思うんですが、その場合に確かにヒット数が物すごく多いので、結局その検索の仕方が問題なんじゃないかなと思うんですね。

つまり、「原子力」でいきなり引いてしまうと、どうしてもそっちが先にだあっと出てしまうとかということなので、なかなか難しいことですが、例えば童話、児童向きの文学とか、そういうのからだんだんにさかのぼってエネルギーとか原子力という形で探すとか、そういうやり方を多少してみたらどうかと思います。

参加者（藤原） 入り口の入り方というのは方法論とか技術論のお話なので、そこはもう、そこここがすればいい話なんですけれども、理解はしましたので。

ありがとうございます。

中村コーディネーター やはり藤原さんが指摘されたのは、逆にホームページのつくり方とか入り口のつくり方とか、そういうことがやっぱり問われているんだろうなとは思いますが。

中村コーディネーター では、東嶋さんどうぞ。

東嶋委員 今回の藤原さんのご意見、非常に示唆に富んだご意見だと思って伺ったんですが、例えば医学系の情報を私などが得るときに、やはりそういう医学系のデータベースがあって、あなたは専門家ですか、それとも専門家外の方ですかとか、あるいは患者さんですかとか聞く、問いかけてくれるところがあるんですよね。それによって、自分の知りた

い情報に早く到達できるというやり方があるので、原子力にも恐らくおっしゃったような原子力ナビなどは、どのレベルの人を対象にしているのか、おっしゃったようにわかりにくいところがありますので、ぜひ藤原さんのご意見を参考にして、ある程度理解が深まっている方向けなのか、それとも初心者向けなのか、子供向けなのかという、そういう入り口でドアを開けるやり方をぜひ取り入れていったらいいかと、非常にいいご意見をいただいたと思います。

中村コーディネーター では小川さん。

小川委員 では一言。

藤原さんと、それから先ほどの野口さんのご意見のヒントになるかもしれませんが、ネットを使われるということなので、電力会社はある方向性を持っているホームページかもしれませんが、電力会社では双方向のコミュニケーションでのネットでのやりとりをしています。どの電力会社さんでも質問のある方はこちらへというページが、少なくとも私が勤務している会社ではそうなんですけれども、それから私がきょうWinという立場で来ていますから、Winのホームページでも質問があれば、とことんその方とやりとりしながら、その方の本当の疑問はどこなのかなという、やりとりしながらやっていくホームページも展開しておりますので、まず自分の疑問をそのままホームページで聞いてみるということもよろしいんじゃないかと思います、いろいろ探したりしなくても済みますので。

以上です。

中村コーディネーター 吉岡さん、補足は何ですか。

吉岡委員 東嶋さんの発言に触発されたんですけれども、私も家族に病人がいて、病気の性質とか治療法の選択肢とかを勉強するのに何を読むかというと、一般向けのは読まないですね。専門書しかも英語のも含めて読むしかない。問題が切実ならば、それはそこまで行かなきゃ、最善のものを入手するよう努めなきゃ恐らくだめであって、原子力もある意味ではそれと同じような問題です。先ほど直接マン・ツー・マンがいいと言ったけれども、本ぐらいは何冊か買ってお読みなさいということはお勧めしたいと思います。専門書です。

中村コーディネーター はい、という吉岡さんの一つのご意見です。

では、会場の皆さんからまたお受けします。では、こちらの男性どうぞ。

参加者（古川） 大野城市から来ました古川と申します。

先ほどちょっと学校の先生のグループというので、一応教員をしていますので、そして教員の仲間でちょっとエネルギーについて勉強しています。一番僕が思っているのは、環境問題とエネルギー問題が、日本の学校の教育の中では別々に教えている、だからそこは僕は非常に問題かなと。環境問題と必ずエネルギー問題を絡めながら教えなきゃいけないのがなされていないので、我々の教員のグループで何人かで勉強しようということで、勉強しようと思ったときに、やはりさっきの情報は流れていますかということですが、そんなことは言うてなくて直接ぼんと聞きに行くんです。西部ガスだとか九電とかの広報部に、自分たちはこういうことをしたい、こういうことを聞きたい、だから僕は先ほど意見がありましたけれども、ネットとかも使わないんですね。ある意味ではヒット数が多過ぎるから。直接広報部に行って勉強をしたいんだけど、こういうことを勉強したい、こういうところを知りたい、環境全体の中で水力や火力やいろんな風力である、あるいは原子力もその一つとして、そして環境問題の中で取り上げようと。そういうことを聞くと、結構九電さんも西部ガスさん　ここは原子力か、西部ガスは来ていないですね。

中村コーディネーター　いいですよ。

参加者（古川）　結構向こうもどうやって教えていいのかというのを悩んでいるんですね。ですから、こちらの方から逆にこういう形で教えてほしい、こういうふうな加工をした形で教えてくださいということを言うと、非常に親切に教えてくれる。これは僕の今の中の実感で、それをできるだけまた自分たちで考えながら生徒に教えていこうと、教えてはいますけれども、ただその中にやはり原子力にしる何にしる、やっぱり環境と必ず絡めて、そのこのところを僕はこれからは肝心なところじゃないかなと思っています。

以上です。

中村コーディネーター　ありがとうございました。

これはさっき新井さん言われた教育の問題とも本当に密接な関係で……

新井委員　ちょっと質問させてもらってよろしいですか。

石炭というのは今の子供さん、見たり触ったり何かなさっているんですか。私の教えている大学では、本当に微々たる学生しか知らないんですよ、学生さん。だから、そこが知りたいのですが。

参加者（古川）　見たことも　博物館とか、そういうところで、見るみたいですね。石炭博物館とか行く機会がある子はいますけれども、普通の子はもう全然知らないですね。

新井委員　原子力でどうですか、行ったことがあるとかというのはありますか。

参加者（古川） 学校によってはやっぱり玄海とか、うちの娘の方はこの前玄海に行って、家族でもよく連れて行くんですけれども、そこに行きますけれども、だからエネルギー自体がわかっていない子供がやっぱりたくさんいます。環境というのも頭でわかっているけれども、実態としてわかっていない子供たちも結構います。

ですから、そこら辺を内閣府ですけれども、文科省と一緒にあって、ただ僕がそこら辺で実際見学とか行ったときに肌で感じるのは、原子力も火力とかも、物すごく環境に今非常に、石炭の粉が飛ばないようにとか、物すごく環境に配慮して、そういうところを僕らはやっぱり言わなきゃいけないと思うし、また原子力は今の人たちを犠牲にしては絶対いけないんですけれども、僕として今研究している人たちの姿を見ていくと、今も大事なんだけど、30年後の日本のエネルギー問題、これを視野に入れているなということを感じます。そのために、ある研究者の配管とか何か亀裂が入って、これを直すために10年、20年のスパンで研究されていますよね。その方も50過ぎているんですよ。ということは、その方はもう退職されるんですね。退職されるんだけど、その事業は次の人に受け継がれていって、もうそれを見たときにエネルギー問題というのはそういうスパンで見なきゃいけないんだということを、確かに放射能が今の人たちに害があったりとか、先ほど言いましたけれども、今の人たちを犠牲にしては絶対にいけないと思うんですけれども、やはりその安全性とともに、そういう長いスパンでエネルギー問題とか環境問題を考えなきゃいけないとは考えています。

最初の質問と変わりますが、余り知りません、子供たちは。

中村コーディネーター ありがとうございます。

新井委員 ちょっと余分なことなんですけれども、前学期のときに、学生に話す都合があって、ちょっと中国の石炭の話を調べてみまして、中国は石炭王国ですからすごいんですが、炭鉱の死亡者が年間6,000人と聞いたので、これはなかなか石炭も大変なものなんだということが分かりました。原子力というとき事故が非常に強調されますけれども、もう少し大きく見ると、これはまたこれで相対的に問題いろいろあるのだなということをやっと認識しました。

中村コーディネーター ありがとうございます。

出光先生。

出光講師 先ほど電力会社とか西部ガスとかの方に行って質問されているというお話でしたけれども、大学の方でも出前講義とかやっておりますので。ちょっと高校限定で、中

学、小学校までは行っていないんですけれども、高校までですとリストを出して、その中から好きなテーマで日程が合えば講師を派遣しますというのをやっておりますので、ぜひご利用ください。

中村コーディネーター 九州大学のもご利用になってください。

木元座長 すみません、それはただですか。

出光講師 一応ただですけれども、ただで一時期は旅費もこっち持ちでやっていたんですけれども、いいように利用されているというところもありましたので、できれば旅費ぐらひは出してくださいということで、ちょっとフィルターをかけるようにしております。講師料は無料です。

木元座長 ありがとうございます。

中村コーディネーター それでは、こちらの女性。

参加者（佐藤） 福岡市内より参りました佐藤と申します。よろしくお願いいたします。私の方からは、教育現場への情報発信の願いをということでお話しさせていただきたいと思います。

今のこのエネルギー問題や原子力は、私たち以上に子供や、そのまた次の世代にとってのとても重要な問題だと思っています。今でも中学校などで総合学習の時間などを活用してエネルギーや原子力に関する授業があるようですが、環境問題などに触れる程度で、それほど長い時間はかけられていないようです。また、食事や農業問題もそうなんですが、エネルギー問題は子供のうちから正しい知識を蓄えて、理解を深め、大人になったときに正しい判断ができるようになってほしいと思います。

最後になりますが、原子力発電所の事故など、迅速に情報を公開されることも大事だとは思いますが、国や企業が学校やPR施設などでの次の世代に向けた地道な情報発信にも力を注いでいただきたいと思っています。

ありがとうございます。

中村コーディネーター はい、ありがとうございます。

これは木元委員、きょうの座長であるとともに原子力委員なわけですが、木元委員も特に幼児期から、子供のときからのエネルギーあるいは環境教育の重要さというのはいろいろなところで強調されていらっしゃると思いますが。

木元座長 さっきちょっと息子のことを話しました。藤原さんのご意見もありましたけれども、子供の質問があったときに自分が答えなきゃいけない、その答え方によってこの

子たちがどういう考えを持ち、どういう生き方をするかということが出てくるわけですね。そのためには、正確な資料を大人がしっかり持っていなきゃいけないし、それをまたわかりやすく伝達する手法も考えなきゃいけない。そこで情報は提供します、ですけれども結論を出す、選択をするのは彼らなんですね。そのために、そこまでの情報を私たちはきちんと出していく。

ですから、先ほど小出さんが最初に自然エネルギーの大切さ、省エネの大切さのお話がありましたけれども、それも情報の一つだから、それも出します。では現実には、自分たちがどういう生活をしたいか、そしてそのときにどのようなエネルギーの使い方をしたか。すると、例えば電力の方がいいといった場合、では電力は何でつくるのか、そういうことのいろんな情報を提供して、それぞれにメリット、デメリットがあれば、そういうリスク情報なども共有しながら考えていく。そこまでステップアップしていけばいいなと私は考えているんですね。だから、それが今のお話のような形で学校にまで反映していくといいのですが、先生は時間がないからねとおっしゃるんですね。時間がなくてというお断りをされちゃうと、何かお話ができなくなっちゃうんですが、先ほどの古川先生は随分工夫していらっしゃると思うんですけれども、教えていただければまたありがたいと思います。

中村コーディネーター 古川先生は、今の佐藤さんのような方がたくさんいらっしゃる和我々も非常に期待できるんですけれども、本当に教育の現場で先生たちというのは、この環境問題あるいはエネルギー問題、原子力の問題というのを積極的に取り上げて子供たちに伝えていこうと思っていらっしゃる先生というのは多い方なんですか、それとも少ない方なんでしょうかね。

参加者（古川） 少ないと思います。

中村コーディネーター 少ないですよ。印象としては少ないんですけれども、佐藤さんいかがですか。

参加者（佐藤） 私も少ないと思います。

中村コーディネーター 余り積極的に取り上げる方はそう目立たないですよ。そこら辺もまた文科省との話し合いになるのかもしれないけれども、学校の先生も確かに忙しいんでしょうけれどもね。そういう熱心な先生がふえていただけるとうれしいなと思うわけですが、伺いました。

ほかに。では、そちらのシャツの方、どうぞ。

参加者（田嶋） 玄海原子力発電所から来た田嶋というものなんですが、こういう市民参加の懇談会というのを開かれることを、とてもいいことだと思うんですが、実際この会場にどれくらい市民の人が来ているのかなというのがちょっと疑問に思ってますね。どれくらい、どういうふうを選んでくるのかなとか思ったりするんですよ。もっと発電所の人間とか、そういう関係の全く知らない人たちにこういうふうに話をして、こういうことをやっていますよというのを、もっと広く伝えられるようなことがあればいいなと。先ほどの伝える方も大変だし、受ける方も大変だというのは聞いていて思ったんですけども、そういう伝える側だけ努力を求めるのはなんなんですか、頑張ってもらいたいなと思って発言をさせていただきました。

たどたどしくて申しわけありません。

中村コーディネーター 田嶋さん、何となく今日は、ある恣意的な人を選んでお招きしているというふうに感じましたか。

参加者（田嶋） 何かそう……

中村コーディネーター そうなんですか。

参加者（田嶋） 何かフリーな感じの人たちが集まるのかなと思って来たんですけども。

中村コーディネーター 時間帯の問題もあるんでしょうけれども。

参加者（田嶋） そうですね、月曜日のお昼とかもあるんだろうなと思いながら、思ったりするわけで、でも先ほどお子さんがいらっしゃる方で不安だと言われたり、関心のある人はちゃんと自分で足運んできているんだなというのもわかってよかったなと思うんですけども、もっともったこうなあとあって、ちょっとしゃべらせていただきました。

中村コーディネーター 結構です。ありがとうございます。

確かに、この平日の午後という設定については、ご批判もあろうかと思うんですけども、ただ今日やりますということについては全くオープンで、自由参加です、どなたでも参加できますという形です。市民参加懇談会、我々の会は基本的にはそういうことでやっていますので。ただ、そんな時間に行ける人は何人いるのと言われると、これはまた事務局のほうと相談しなきゃいけない問題になってくるんですが、特にこういうところの人に声をかけたというようなことは全くありません。今回は新聞折り込み広告とネットの広告募集でやったのかな、その形だったと思います。

木元座長 今の方、田嶋さんでしたっけ、伺わせていただきたい。玄海の発電所で・・・

参加者（田嶋） はい。

木元座長 働いていらっしゃるんですか。

参加者（田嶋） 働いています。

木元座長 きょうお休みですか。余り言っちゃいけないかなあ。でも……

参加者（田嶋） 出張という形で。

木元座長 ありがとうございます。

中村コーディネーター ありがとうございます 余りそういうのは聞かないでくださいよ。

木元座長 そうかそうか。ごめんなさいね、でもうれしかったです。やっぱりこういうのって必要だとおっしゃっていただけたので……

参加者（田嶋） 必要だと思います。

木元座長 そうですよ。また参加してください、出張で。ありがとうございました。

参加者（田嶋） 聞きたいと思っています。

中村コーディネーター ありがとうございました。

ほかにいらっしゃるいませんか ちょっと待ってくださいね。

はい、そちらの方。

参加者（長澤） 福岡から来ました長澤と申します。どちらかという原子力の関係者でございます。最初から言っておきます。

先ほど小・中学校、教師の方が発言されて頑張れという声援をあげたい気持ちもありまして、実は私は逆の立場でございまして、私は2人の子供がおります。もう既に高校に、下も高校になるように大きくなりまして、途中小学校、中学校と私、原子力に携わっておりますので、もし役に立つことがあったらどんどん言ってくださいということで、学校の方にいろいろ自由研究だとかいろいろありますね、共同学習だとかこのごろありますので、申し出ました。でも、やはり電力会社ということで少し色がついているんじゃないかというように警戒されます。

また、今の先生たちは、私からするともっと頑張れと言いたいのは父兄の顔色、これを伺っています。父兄の中には、原子力に対して積極的な方、消極的な方いらっしゃいます。でも、何かそういうところを言うと、消極的な方の声は絶対大きな声になるんです。そうすると、教職員の方の中には、そんな面倒くさいことにはかかわりたくないという気持ちになる人が大勢いらっしゃいます。だから、先ほど言われたエネルギー問題や環境問題や、

要は議論が持ち上がることに對してはかかわり合いたくないという教職員の数が圧倒的に多くなる原因です。だから、これは内閣府がやっていらっしゃるので、本当は文科省、先ほどの方も言われましたけれども、文科省ではもう少しガイドラインなり何なり言って、私たちが言うことがもしかして色がついているんだったら、先ほど木元さんが言われたように、いろいろ情報を与えればいいんです。それでその人たちにいいとか悪いとか私たちは言ってほしいとは言っていないんです。原子力とはこういうものなんだよ、風力とはこういうものなんだよという情報を伝えたいと思っても、やはりそんな面倒くさいことにはかかわり合いたくないという　悪いんですけれども、先ほどの教師の方には申しわけないんですけれども、そういう方がいっぱいいらっしゃいまして、私たちの言うなれば情報を伝える側の努力が実らないという場合もあるということを言いたいと思って意見させていただきました。

中村コーディネーター　ありがとうございました。

それでは、そちらのシャツの方。

参加者（徳永）　福岡から参りました徳永と申します。

最近、原油価格が急騰したりですとか、アメリカでは巨大なハリケーンの被害が出たということで、いわゆるエネルギーの安定供給の確保と、また地球温暖化問題への対応ということを考えますと、私は今後とも原子力発電は必要で不可欠なものというふうに考えております。

今回取りまとめられております原子力の政策大綱につきましても、興味を持って拝見させていただいております。今回の原子力政策大綱の策定に当たりましては、原子力委員会ではいろいろオープンに議論をされまして、またご意見を聴く会ですとか、こういう市民参加懇談会、また意見募集という形でさまざまな情報を取り込んでいこうというふうな考えをお持ちであろうと思います。そして、そういう議論のプロセスもしっかりと原子力委員会のホームページの方に記載されておりまして、本当に興味があって自分からアクセスしようという人についてはこの議論の成り行き、すべてわかるようにしっかりとされていると、しっかりと情報も整理されているというふうに思っております。

しかしながら、この原子力発電の必要性ですとか有効性、そして国の政策がどういったものであるかという観点でいきますと、どのくらい今の人々に伝わっているのかということと考えますと、先ほどから幾つか言われていますけれども、残念ながら伝わっていないところもあるのではないかというふうに思っております。

原子力の政策は国として考えるレベルのもので、たとえ受け身であったとしても、しっかりとインフォメーションが国民の方にも伝わる必要があるというふうに思います。そうしますと、結局は新聞ですとかテレビですとか、そういうマスメディアの方にしっかりと正しく伝えていただく必要があるというふうに思っております。

今回間もなく取りまとめられると思いますけれども、原子力政策大綱で、多分新聞にも取り上げられていこうと思います。そういう新聞記事の中では、この政策大綱の概要ですとか、しっかりと記載されると思いますけれども、その一方で多分今後の課題ですとか、そういう問題提起で最後の文章が終わるのではないかなというふうに思っております。これを読みますと、大体国はこういう政策だと言っているけれども、新聞を見るといやまだまだ問題があるんだと、山積みなんだという印象でばかり終わってしまうような感じがあります。

テレビでは郵政民営化という問題が先日来ずっと出ておりましたけれども、やはり総理大臣みずからがそういう発言をされていかれたということが大きいのかもしれませんが、原子力政策について、原子力委員会ももちろんそういうのを代表して検討されていると思いますけれども、国会ですとか議会ですとか、そういうところの方が例えば原子力についても原油価格がこれだけ上昇しているけれども、オイルショックのときのように生活に大きな影響がないというのは、やはり原子力を今までやってきたことがある程度役に立っているんだというふうな発言をされたりすれば、大分そういう必要性とか有効性というのが伝わっていくのではないかなというふうに思っております。

例えば温暖化防止に向けてのクールビズ、この夏はやりましたけれども、これは次々と新聞の方に書かれたり、テレビでそういうシャツを着た方の映像が流れれば、十分このクールビズというのが国民の方にもしっかりと伝わったんじゃないかなというふうに思います。

原子力は大体マイナスの不安なイメージがつきまっておりますけれども、まずは必要性とか有効性とか、そういうものが伝わって、初めてこういう原子力の政策というのは現実のものとして受け入れられていくのではないかなというふうに思っております。

有効性とかそういうこと、そして国の政策であるということをしっかりと伝えていただきたいというふうに思っております。

ありがとうございました。

中村コーディネーター ありがとうございます。

マスメディアの役割について、井川さん何かありますか。

井川講師 今、マスメディアにしっかりしろということでしたけれども、一つだけ、今おっしゃったご指摘は重く受けとめて、これからも努力はしていかなきゃいけないわけですが、例えばこの市民懇談会でさえ、この市民の方のお話を伺うというのはとてもいい企画なんですけれども、例えばさっき何でこんな時間にやるんじゃということをおっしゃるようなこともありますし、やっぱり我々はやることについて、よりいいものを目指してほしいなということで意見を述べているつもりです。そうでないものもありますけれども、ぜひその意味で新聞も前向きにとらえている部分もあるんだと、ただし前向きにいろいろ意見を言ったり課題を言ったりしている部分もある。それから原子力については一つだけ申し上げさせていただければ、極めて超長期にわたる、中長期というか30年、50年、廃棄物の話になれば1000年、1万年ぐらいのレベルの話になりますので、やはりそれだけの間スムーズに行くわけなくて、やっぱりいっぱい課題があるんだよという、そういうことを踏まえて原子力に携わっている人がやらないと、やっぱりどこかでけつまづくということがありますので、そういう観点から私どもは書いているんだということだけご理解いただいて、ただそういうご指摘があったのでますますその努力はしていかなきゃなと思います。

それで時間だけ、一つだけ。前、外国といってもカナダの話を聞いたんですけれども、市議会とかそういうところは実は夜やったり、市民に近い部分は、皆さんお仕事終わった後夕方から夜にやってみたりとか、やはりもうちょっと市民の実際聞きやすい、参加しやすいという時間設定があるので、これは僕からもお願いですけれども、木元先生、ぜひご検討をお願いしたいなと。

中村コーディネーター ありがとうございます。イギリスでもありますよね、夜議会やるという。

それでは、続いてそちらの女性、お願いいたします。

参加者（池松） すみません、私、名前をすぐ忘れるので。北九州から参りました。

先日、佐賀と唐津の方に行きまして、いざ何か起こったときに機能するという場所、オフサイトセンターに見学に行ったんです。そうしたら、国が随分お金を出しているらしくて、コンピューターとか、いっぱい投じているんですね。それで、大きな画面がありまして、日にちはその日にちになっていたんですよ。それで地図とか、それから風向きとか出るようになっていたので、きょうの今の時間帯と、それからこのすぐそばでなくて、福岡からずっと下関の方まで影響があるんだから、そっちの方を出してくれと言ったんですよ。

そうしたら、だれも動かせる方がいらっしゃらなかったんです。こういう状態で本当に何か起こったときに機能するんだろうかと思って、とても心配になりました。

それで、先ほど小出さんが非常に不安をおっしゃったんですけれども、私もただの人間として本当に不安です。そういういざというときの処置も全然できていない、そういうものでブルサーマルをやってどうなるんだろうかという大変な不安を持ちました。そこも一つの情報をちゃんと見に行っているんですから、ちゃんとした情報が私たちに伝えられていいところなのに、物すごいお金のむだだなと思いました。

中村コーディネーター　すみません、北九州のどちらさまでですか。

参加者（池松）　池松と申します。

中村コーディネーター　池松さん。

ちょっと、オフサイトセンターについての誤解があるみたいですが。

参加者（深江）　補足していいですか。

中村コーディネーター　補足してください、ちょっと趣旨がわかりかねたところがあったので。

参加者（深江）　その4枚ぐらいの大きさのパネルのテレビ画面があるんですね。そこに玄海町周辺の地図があって、事故が起きたときの風向きと放射能がこういうふうに流れるというのがあられるわけです。その地図は大きくできるんですかという質問をしたら、できますということだったので、では大きくしてくださいというのと、風向きがこっちの方に流れたら放射能はどういうふうに流れるんですかという質問をしたんです。そうしたら、残念ながらできなかったということです。たまたま、そこにいた……

中村コーディネーター　広域の地図が出せなかったということ。

参加者（深江）　そうです、もうその画面がもう固定されたままで、本当は九州全体の地図もそこにぼんと出して、放射能がこういうふうに、この風向きだったら流れるというのが出るはずなんですけれども、たまたまそこにいた何人かの職員が操作できなかったということを残念に思っていますということ。

中村コーディネーター　はい、わかりました。

木元座長　いわゆる風の流れのシミュレーションを出せないということなんですね。それはすごい専門家になっちゃうのかな。私も何回か行っていますけれどもね。いざというときは、すぐ急報が来てぱっと人が駆けつける状況にはなっているんですけれども、そういうふうにいると操作し解説をするという人は常時いないかもしれません。

中村コーディネーター オフサイトセンターは平常時は少ないですよ、人が。

木元座長 そう、だから非常時のためのセンターという解釈で、そういう解説の人もスタンバイしていない、多分。

参加者（池松） そこにはちゃんと説明のパンフレット、色つきのパンフレットもちゃんとあるようなところなので、やっぱりそこに行ったら、ちゃんと情報が入るようにしておかなきゃ何の意味もないと思いました。

中村コーディネーター ありがとうございます。

ほかにご質問の方いらっしゃいますか。いらっしゃらなければ、また再質問を認めてよろしいですか。では、ほかの方は皆さんまた考えておいてくださいね。

いいですよ、では深江さんどうぞ。

参加者（深江） すみません、ずっと我慢しておりました。

先ほどエネルギー問題でいろいろ学校で、授業でどういうふうに話をするかとかという話がありましたけれども、私も長年PTA活動をやっております、自分の学校で2回ぐらいエネルギー問題の話を子供にしたことがあったり、いろんなほかの学校にもお呼びがかかったりするんですけれども、原発の話は余りしません。これはなぜかということ、賛成、反対両方の意見があるので、反対の立場だけで話をしてもらったら困る、賛成の立場だけで話をしてもらったら困るという学校の立場がありまして、そこら辺はオブラートに包んで環境問題で放射能の話をしします。

先ほど来の話ですけれども、放射能の話を一体どこまで理解して原発のことを理解されているのかというのを、もうちょっと情報を調べていただいた方がいいのではないかと思います。出光さん、旧動燃ということですが、人形峠でウランを採掘しましたよね。わずか日本の原発が半年間動かせるぐらいのウランしか取り出せなかったんですけれども、にもかかわらずそこに残ったウラン残土200万トン、ウラン残土でさえ日本は片づけられない、最高裁が撤去を命じておりますけれども、何か知らないけれども、アメリカに持って行って濃縮をしてもらうというようなことでごまかしていますけれども、それでも膨大な放射能を含んだ残土がそこに放置されたままになっているんですね。ウラン残土ですら何ら片づけ切れない私たちの社会が、放射能を、核のごみを一体どうやって処理できるのか、このことがもう少し国民にオープンに知らされないといけないというふうに思っております。

日本で使っているウラン燃料の、その向こうにありますね、ウランを採掘している現場

では、一体どれだけの量のウラン鉱石、残土が放置されて原住民が放射能の被害に遭って死んでいっているのか、このことを一体ここにいる方が何人ご存じなのか。石炭で何千人という話がありましたけれども、それも大変ですけれども、私たちは玄海原発で燃やされているウランがわずか20トン、これを石炭にするとタンカー何隻という話を聞くときに、ではその20トンの濃縮ウランをつくるために、一体何百トンの鉱石が必要なのか、残土が必要なのか。物すごい量がそのまま放置されている。放置しているから、日本は今世界一高いですけども、私たちは安い電気を使って豊かな生活を営んでいくわけですね。そのことをやっぱり考えないとだめだと思います。

結論に行きますけれども、使用済みMOX、一体これを国はどうしようとしているのかというのを明らかにしていただきたいというふうに思っております。

せっかくおとし電気事業連合会がバックエンド試算というのを出しました。6万6,000トンの使用済みウランを六ヶ所村で3万2,000トン再処理して、残り3万4,000トンは中間貯蔵ということで試算をまとめましたね、19兆円かかると。その中に使用済みMOXは入っていないわけですけども、それを全部再処理するという話をまた持ってくると、そのお金が一体何十兆円になっていくのかということですね。そのことを全く包んだまま、2010年ごろから検討を開始しますということでプルサーマルをやるうとしている。2010年からプルサーマルは開始するわけですけども、開始するときには使用済みMOX、使用済みウラン燃料と比べものにならない毒物を含んだMOXですね、500年かかりますけれども 地下に埋められるまで、下がるにはですね、そのことが全く解決していないのに始めようとしている、こういう無責任な社会を、そこはやっぱり情報というのはオープンにして、国民の議論に付すべきじゃないかなというふうに思います。今のが2点目です。

中村コーディネーター ありがとうございます。

ほかにご意見お持ちの方いらっしゃいますか。

では、出光先生にちょっとご発言をお願いします。

出光講師 すみません、今の発言の中で、鉱山のところでたくさん被害者が出ているというお話をされましたけれども、本当ですか。

参加者（深江） 映画にいっぱいなっています、ドキュメンタリー映画で。是非ごらんになってください。

出光講師 人形峠の方もウランが排出されています。あれも私もニュースを聞いてじく

じたる思いというか、あんなに安全に処理しているのに何でアメリカまで持っていかなきゃいけないのかと、向こうで廃棄物扱いされないから濃縮して、わざわざ廃棄物にしなきゃいけないというのを、何てむだなことをするんだろうなという気はしましたけれども、あのときも　　ちょっとこの話を余りしているとあれですけども、どこまで危険だから追い出しているのかというのはよくわからなかったですね。人形峠の人たちに何ら健康被害が出ているかどうかという、私は出ているという話を聞いたことがないし、一度廃土の上に覆土を重ねて、住宅の農家の方でアルファ線源が出て汚染だという騒ぎがあったという話を聞いたことがありますけれども、あのときも線源の源は使っていた肥料でしたよね。肥料の中に入っているラジウムが引っかかって、それがアルファで出たんだろうと。途中の廃土を置いてあるところからその田んぼのところまで、途中に何ら汚染がないと。もし汚染が広がっているのであれば、そこに途中に必ずあるはずだけれどもそういうのはなくて、農地だけで出ているというのを調べてみたら、どうも使っている肥料の中に入っている天然のラジウムみたいだということです。本当にそういうところで被害が出ているのかどうかというのは、若干疑問なところはあります。

中村コーディネーター　出光さんの意見として伺っておいてください、とりあえずは。

ほかにご意見お持ちの方いらっしゃいませんか　　それでは、いらっしゃらないですよ、ほかにね。ではもう一度どうぞ。

参加者（山中）　すみません、先ほどから情報を得るという話がいっぱい出ていて、その情報を得るために電力会社のサイトとか国側のサイトとか、それから各事業者の広報の方に話を伺いに行くということをおっしゃっていたんですけども、物事には必ず裏と表があるわけですから、何か正しく、少なくとも少しでも正しく知りたいと思えば、一方的な情報でなく双方向の情報を得るように努力した方がいいんじゃないかと思います。例えば砂糖にしても、糖尿病になるという観点と、多少の砂糖だったら脳によく働くという2とおりのことがあるわけですから、ただただ一方的に見てそれをうのみにしていくのは、少なくとも子供たちに何かを伝えたいと思うなら、考えなきゃいけないと思います。

先ほど木元さんがおっしゃっていたように、いい面と悪い面とを両方出し合って、正しい情報を出し合って、そしてそれをやっぱり受ける側は余り安易ではなく、それなりに学習して、自分はではやっぱりこっちの方を正しいと思うからこっちをとろう、いや私はやっぱりこっちが正しいと思うからこっちをとるという、そういうのが議論だろうと思うんです。その努力は、多分受ける方もしなければならぬんじゃないかと思います。

話が戻るんですけども、先ほど佐賀県で九州電力がプルサーマルについての公開討論会を開きました。何だか寒いときでした。それは、あらかじめ佐賀県民しか行けないということはわかっていたんですけども、プルサーマルが一たん事故を起こしたら、福岡もすぐにもう大変危ないところになるわけですから、人ごとではないので、何とか入れないかと思って会場まで行きました。雪がちらついて寒い日でしたけれども、そうしたら私たち佐賀県民じゃないから絶対入れてくれないんです。寒いからトイレに行きたかったんですけども、トイレも貸してもらえなかった。それはいいんですけども、ではなぜ入れてくれないのか。当日あいていたんですよ、座席は。あいていたというのは中に入っていた人から聞いたんですけども、あいていたけれども入れてくれなかった。ではもういいですよと、初めから佐賀県民だけと言われているんだから、それはそれで仕方がない。では、せめて当日配布の資料だけでも持って帰ることはできませんか、では相談して来ます、私たち当然持って帰れると思ったんですけども、それもだめでした。

今度の10月2日の玄海町での公開討論会ですが、それにも私たちは参加できません。どこでもちゃんとしたお話を伺うことができません。そのかわりだからといって、きょうがあるとおっしゃったんですけども、ここでは情報が届いていますか、あるいは届いていません、届いていないならどんな情報が届いていませんかという、ある意味一方的な情報についての話であって、私たちが勉強した分とかについて、ここで話すことはかなり難しいです。では、両方の情報が必要なのに、片方の情報は全然上がってこないんですよ。私はこういう状況がとても不満だというか不足しているというか、例えばドイツではあらゆる情報がきちんと出るんです、いい面も悪い面も国が、あるいは事業者が全部出すんです。ここはこの辺が幾つかの数値があって、この数値までだからこれは危険だとか、この数値だったら大丈夫だけれども、今回ここまで数値が出たとか、全部出しているんですね。その中でみんなが議論して、やっぱりやめていこうというふうな話ができる、でもすぐにはやめられないから何年を目安にやめていこうという話ができる。私たちもドイツ人並みに、私たちも確かに何も知りません、専門家の方はよく知っていて、私たちは何も知りませんけれども、情報を少なくともきちんと出していただいて、その中で私たちは私たちにに勉強しますから、もっとちゃんとした議論をさせてください。何だか例えば九州電力はプルサーマルは大丈夫ですよ、ウラン燃料の残ったものを使って、これはリサイクルでしょう、豆腐食べた後のおからみたいなものですよと言われますけれども、そんな子供だましな話で、1000年もひょっとしたらかかるかもしれない、玄海に500年

も使用済みMOXを置いておかなきゃいけないかもしれない、そんな話を、そんなところで決めていっていいんでしょうか。少なくとも、何だかせめて国がそこら辺の、もうちょっと国民を子供扱いしない方法がとれないものでしょうか。いつもそう思っています。

きょうも10月2日のかわりにされるには、余りにも……

そういう意見が出せないです。

以上です。

中村コーディネーター わかりました。

大分誤解が幾つかあるんですけれども、いろんなこと的不满があるというのはわかりました。そのかわりに今日があるわけでは、まずありません。

参加者（山中） 先ほど言われました。

中村コーディネーター いや、そのかわりとは言っていません。そのかわりにあるわけじゃないんですよ。全く違う意図のもとに、我々は皆さんの声を聞きに来ただけです。

それから、多分10月2日も公開討論会はないと思いますよ。説明会じゃないですか。

参加者（深江） 1部は討論会です。

中村コーディネーター 1部、討論会ですか。1部、必要性についての パネルディスカッションという意味ですね、公開討論会というのはそういう意味ですね、わかりました。そういう意味では、公開討論会という形の壇上でのパネルディスカッションというのは2日にはあります。ただ、その辺は確かに皆さんにとっては、主催するところが違って、担当が違って、それでそれぞれ違うというのはわけわからんというのは、これは確かにおっしゃるとおりだとは思いますが、ただ不満の部分というのは非常にわかったというかご意見として伺ったんですけれども、それを今あなたたちがどうかしろと言われても、これはちょっとまた違うところへ行ってしまうんです。

ではすみません、井上チイ子さんどうぞ。

井上委員 山中さんの思いがすごい伝わってくるんですよ。何でそれに答えてあげられないのかと思うとすごくはがゆい。私も一市民で、関西から来ましたから、思っておられるプロセスに私たちもいましたから、すごくわかります。

よく大きな会なんかでいろんな難しい説明を聞いて、ご質問はと言われたら、質問ができない、質問ができるほど自分は何もない、したいけれどもわからない、何を言ってもわからないというのを私もよく思います。では、何かもうちょっと勉強しなきゃと思っても、なかなかそこまでいかない。私は関西にいて、特に、原子力とどこでどうかわっ

たかというきっかけが、やっぱり阪神淡路大震災だったんですね。それで、まさしく身をもって、すべてライフラインがとまり、電気がとまり、夜になっても寒い中1月でしたから、どうしようどうしよう、ご飯できない、子供たちが帰ってくるみたいな、そんな中で一体これ電気どこから来るの、ガスはどうなっているのというのがやっぱりきっかけだったんです。すごいインパクトのあるそういうきっかけで、初めて原子力とか電気とか、私たちが普段もらっているのはどこから来るかというのもわかったんですね。それから10年たちました。本当に壁にぶつかったり、不満を持ったりいっぱいあったんですけども、少しずつ自分で動けばいいんだとか、先ほどおっしゃった直接ダイレクトに聞きに行けばいいんだという道筋みたいなものも覚えて、このごろは放射線なんか怖いとか、言うけれども、自分たちで「はかるくん」というのを持ったりしてはかたりするんです。それもちょっとじゃなくて半年とか1年間継続して、100人ぐらいで1回やってみようとか、何かそんなところからも知りたいことを自分で知るという手だても見つかるかなと思って、もし参考になればと思います。それだけです。

中村コーディネーター 吉岡さん。

吉岡委員 原子力に関する政府や電力会社の説明が子供だましとおっしゃられたけれども、私も同意見なんですけれども、なぜ原子力をやるのか、なぜプルサーマルをやるのかの大人の議論をやるような文化が育てばいいなと思っています。単に私の感想ですけども。

本論に入りますけれども、プルサーマルシンポジウム、今まで気づかなかったんですけども、私はシンポジウムの演者なんだけれども、当日はやはり佐賀県及び長崎県高島町在住の方のみに限られ、さらに玄海町、唐津市在住の方を最優先するとなっている。福岡県はだめというような、そういう書き方をされていて、2月もそうだったんです。主催者は、それぞれ九電とエネ庁なので、私たちはかかわり知らぬことなんだけれども、2月20日は特に後半部は半分ぐらい席があいていて、空席待ちがあってもいいんじゃないのかと思った。今回もいいんじゃないのかと、なぜだめなのか、空席があれば入場を認めると、その方が宣伝効果も高まるしいいと私は思っているんですけども、数日間はどうにかならないのかなというのは私の感想です。

中村コーディネーター それは私も吉岡さんも出席しますけれども、今2人はどうしようもできないかなというところですけどもね。

木元座長 私も一緒に出ていたんですけども、あのときは事前に募集方法なんかも随

分検討していらっしやいました。ちょうど、テロの対策を国からしっかりしろということがあったので、事前登録でなければいけないという原則があったんですね。ですから、多分私はちょっと拝見していたような気がするんですけども、バスか何かでいらっしやいましたか　そうじゃなくて。何か横断幕みたいなものをお持ちになっていましたか　あー、それですね。そういうことがあったので、なおさら受付が慎重になったという部分があるのかもしれないけれども、それは原則は貫いたということだけは聞きました。

それと、1部は割合満席だったのに2部では玄海町の方が、各主張をお聞きになって、それでもうわかったということでお帰りになってしまったということも伺ったんですね。ですから、本当におっしゃるように、事前にそういうことをもっと深く検討して行って、席があいているならば、身元をちゃんと確認させていただければ入っていただけると、事前に取り決めていればいいですね。

参加者（深江）　実は私たち、そういうことがあると思ひまして、パネラーで全員申し込んだんです。パネラーで発言をしますということで。それで全員落とされて、なおかつ入場もできませんという返事が来ました。

木元座長　6人のパネリストですか。

参加者（深江）　そうです、6人のパネリストの中に全員応募していたんです、拒否されるだろうと思って、佐賀県民じゃないから。それでパネラーにも落とされて、なおかつ入場もお断りという厳しい処置がありまして。

木元座長　それもちょっとフォローさせていただいてよろしいですか。

参加者（深江）　はい。

木元座長　選考基準も私も厳しくチェックさせていただきました。そのとき6人は賛成の方が2人、反対の立場の方、ミウラさんとかもう一人の方の2人、それから中立の方が2人、玄海町の方でしたけれども、電気屋さんとか、それから女性の方でした。この6人を選考したと。それは、考え方としての公正な配分なので、お申し込みが外れたというのは残念ですけれども、ちゃんとお仲間が入っていたというふうに私は理解しています。ごめんなさい、それだけちょっと申し上げさせていただきます。

中村コーディネーター　その件については事実関係と認識の違いが多分あったというのは私も聞いておりますが、その件はきょうはちょっとここまでにさせていただきます。もう時間もなくなってきたので。

一応、深江さんとお約束した3つのうちの2つまでしか伺っていませんよね。もう一つ

それでは簡潔に発表してください。

参加者（深江） これは木元さんに関係があるんですけれども、2年前、原子力委員会がプルトニウム利用計画を明らかにせよという決定をしましたよね。このことについて電力会社に私たちも何回もプルトニウム利用計画を明らかにしてくださいというのをしております。九州電力は今2.9トンプルトニウムを持っているんですけれども、そのうち核分裂性が約2トンだと思います。東海村にもちょっとありますので2トン弱と。これで計算をすると、4.1回分ぐらいしかMOX燃料ができないんですね。5回と言っていますけれども、4回とあと何十キロ余るかどうかわからない。だから4回分しか基本的にはMOX燃料つくれない。だから2010年からプルサーマルを始めると言っていますが、2005年にはMOX燃料がなくなるわけですね。ではその次どうするか。これだけ大騒ぎをして、その次のプルサーマルをどうするのかということを、ことしの株主総会で社長に直接聞いたんですけれども、計画はありませんという回答が返ってきました。同じように四国電力と中国電力もプルサーマルをやるということで発表しておりますけれども、ここはもっと九州電力よりも、ほんのちょっとしかプルトニウムを持っていないので、多分2回分で終わるんですね。これだけ大騒ぎをして、2回やったらおしまいですというのが今の日本の電力会社が持っているプルトニウム利用計画なんですけれども、それで済むのか、もう少しちゃんとした計画があるのではないかとこの出すべきではないかというふうに思っております。

中村コーディネーター はい、ありがとうございました。簡潔にご発言いただいてありがとうございました。

木元座長 つまり、そういう知りたい情報が届いていないということですね。

参加者（深江） そうです。

中村コーディネーター そうですね、利用計画。はい、わかりました。
では碧海さんも簡潔に、一言どうぞ。

碧海委員 我々コアメンバーというのは、全部背景も違いますし、立場も違いますし、意見も違いますし、全く異なるメンバーだというふうに考えていただきたいんですが、私は自分個人の考え方で、深江さんの先ほどの発言にちょっと疑問を呈したいんですが、私はウランを掘り出した鉱山、そこに残土を埋め戻してなぜいけないのかと、私は個人的には全くそのことに対してはいいじゃないかと。つまり、残土というのはウランを既に取り出しているわけですよね。だから、それをもとへ戻しちゃえばいいじゃないかと、これは

ごく普通の考え方だと私は思っているんですが、その点についてはどう思われるんでしょうか。

参加者（深江） 埋め戻すとか埋め戻さないとかというところでは、私は一言も申し上げていなくて、動燃が掘ったわけですから、動燃が責任を持ってそれを処理すればいいわけです。どういう処理の仕方があるかどうかというのは動燃が考えればいいことで、今動燃と言わないですね、核燃料サイクル機構が考えればいいことであって、それを放置しているから問題があると言っているわけです。

碧海委員 という意味ですね。

参加者（深江） はい。

碧海委員 はい、わかりました。

中村コーディネーター それでは皆様のご発言をたっぷり聞いてきょうはお帰りになるということでよろしいですか。発言されなくていいですか、本当に よろしいようですね。

それでは、もう一人ぐらい、もしご質問があればぎりぎりの時間ですけれども、どなたかいらっしゃいますか。いらっしゃらなければ、ありがとうございました。たくさんのご意見、ご指摘あるいはご質問をいただきましてありがとうございました。

それでは、終わりに当たって、座長の木元さんの方から一言皆さんに感謝の言葉をいただきたいと思います。

木元座長 市民参加懇談会は、まだ発展途上の段階にありまして、決してパーフェクトじゃないんです。ですから、いろんなご不満もおありかもしれませんが、原子力が日本の国に存在していて、それを私たちが利用しているなら、賛成するにしても反対するにしても、これをどう考えるかということのコンセンサスは得ていきたいと思うんですね。その一つのステップとして、この市民参加懇談会があります。今度御前崎でやりますが、その場合は、以前お話しした刈羽村でやったように、自分たちのところでやってくれないかというご要望があったんですね。そのご要望の中で市民参加懇談会ができるところだけのご要望をいただきました。できない部分というのは耐震問題で安全だという人と安全じゃないという学者がいるので、双方を呼んで討論してもらい、それを聞いて市民が質問し、やり合い、市民参加懇談会がコントロールする。それはできないんですね。それだったら、その疑問を持っていらっしゃる方が主催者になって、そういう学者の方双方をお呼びになって討論会として開催なされればいいということでお断りし、今回と同じように「知りたい

情報は届いていますか」というタイトルで、「これまでとこれから」が副題。つまり情報のあり方について、御前崎でやらさせていただきます。ですから、そういう形でお声をくださっても結構ですし、何らかの形でいい方向にこの懇談会が進むことを願っています。

今日は、こういう時間に参加させていただきまして、ご参加しにくい方もいらっしゃったかと思いますが、積極的にご発言いただいたり、ご参加いただいたりして本当に感謝しております。今後も続けますので、よろしくお願いいたします。

本当にありがとうございました。パネリストの皆さんもありがとうございました。（拍手）

中村コーディネーター それでは、第1部のパネルディスカッション、第2部の会場の皆さんからのご意見をいただく会、これで終了させていただきます。

ご発言の中には、質問なんだけれども答えがここで聞けないのは残念とか、もっと知りたいことがあったんだけれどもというお気持ちはわかりました。でも、我々市民参加懇談会というのは、こういうスタイルで広く全国の消費地あるいは立地の皆さんから声をとにかく聞いて、それをしかるべきところにまた具申していくという役割を、ひとつ我々の役割として持っておりますので、その役割だけは果たさせていただきたいと思います。

長い時間、最後まで熱心に参加していただいてありがとうございました。また機会がありましたら福岡なり、北九州なり、玄海なりへ、唐津なりへやってきたいと思いますので、そのときはまたぜひ、積極的に参加をしていただきたいと思います。本当にきょうはありがとうございました。（拍手）

事務局 これをもちまして、市民参加懇談会 in 福岡を終わらせていただきます。

最後に事務局からお願いがございます。お配りした資料の中にアンケートがございます。ご記入いただき、お帰りの際に係の者にお渡しいただければ幸いと存じます。皆様のご意見により、市民参加懇談会をより充実したものにしたいと存じますので、どうぞよろしくお願いいたします。

お出口の方は大変混み合いますので、お気をつけてお帰りください。

本日は大変ありがとうございました。